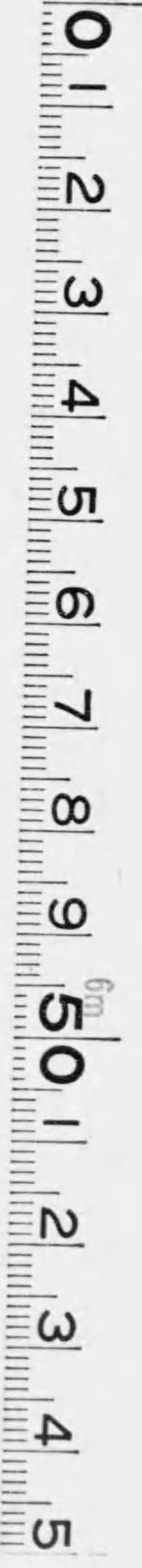


340
36



始



人の心

加藤咄堂著

340-36



人

世

心

大正
3. 12. 10
内交

引

人の心を中心としたる子が感想と見聞とを抄録して此小冊子を成す。想ふ所深からず、見る所博からざれば、其の云ふ所も亦浅くして且狭しと雖も、刹那に動く心の不思議、想うて自ら警め、機微に現はるゝ心の妙用、見て以て他を忖る。此一小冊子も亦豈に靈怪なる心の片影にあらずとせむや。談は平易を旨とし、料は多く教材に採る。婆説紛々、醜きを忘れ、引用多般、煩を厭はず、之れを心理漫筆と見る、或は當らざるべきも、修養心理の一端とする不可なかるべきか。

甲寅初冬、時雨降る夜、代々木村莊に於て

咄
堂
識

人の心目次

心の謎

怪しきは心	一
心の意義	三
大なる心	四
心と我	五
四種の分類	六
心の波	七
理を以て測るべからず	九
理に服して情に枉げず	一一
我執	一二
自己中心	一三
心海波荒し	一四
天邊一輪の月	一七

變り易きは心の常	一八
色と慾	一九
同情の美	二一
欺かざる心	二四
人智の力	二六
知と不知	二七
注意と不注意	二九
直觀と思考	三〇
胡魔化し論法	三一
同	三三
迷ひ易き心	三五
人心と道心	三六

心の亂

心内の戰場……………三六
 呼應して立つ……………三九
 心の縛……………四一
 心王……………四二
 心所……………四四

善惡の心所……………四六
 内亂か外寇か……………四八
 性善性惡……………四九
 本來清淨……………五五

心の敵

敵軍の將……………五七
 叛軍の援助……………五六
 所有欲……………六〇
 名譽欲……………六三

色欲……………六三
 食欲と眠欲……………六四
 百八煩惱……………六五
 心敵如何にして起る……………六六

心の主

兩軍の陣容……………六九

初一念……………七〇

人情

浮雲變態……………九三
 親は泣き寄り……………九四
 得る所は一……………九四
 實用と趣味……………九五
 感情の差……………九五
 蓼食ふ蟲……………九六

天氣て變る……………九七
 聯想と愛憎……………九七
 多情多感……………九八
 異中の同……………九九
 花間の涙……………九九
 色に現はる……………一〇〇

習慣の力……………七一
 吾等の心……………七三
 罪惡の自覺……………七三
 自ら救ふの道……………七四
 己に克つ……………七六
 賊を家人と爲す……………七六
 外縁の力……………八二
 外縁と内縁……………八三

道念の培養……………八五
 眞我の顯現……………八五
 大なる我……………八六
 超越せよ……………八八
 宇宙と我……………八八
 信は力なり……………八九
 飛び込んだ力……………九〇
 守る所……………九二

知己……………一〇一
 心友……………一〇二
 友情……………一〇三
 來往……………一〇三
 離縁届……………一〇三
 中直り……………一〇四
 閻魔帳……………一〇四
 浮世の義理……………一〇五
 義理の柵……………一〇六
 新しき悲劇……………一〇七
 第一人者……………一〇八
 利に争ふ……………一〇九
 さもしき人心……………一一〇
 貧乏人の系圖自慢……………一一〇
 借り著より洗ひ著……………一一一
 自己の識認……………一一二

大なる恥小なる恥……………一二二
 長を語る……………一二四
 出る杭……………一二五
 通じ難からしむ……………一二六
 親子の間も……………一二八
 盗みする子……………一二九
 艶姿女舞衣……………一二九
 兄弟の思ひ出……………一三〇
 死にとまなす……………一三三
 輕重……………一三四
 蜂蠱に色なき能はず……………一三五
 身を捻つて知る……………一三六
 六憎……………一三七
 書籍は粹となる助……………一三七
 男と女……………一三九
 色氣……………一三〇

人情の琴線……………一三三
 共鳴するもの……………一三三
 心と心……………一三五
 心と心との結合……………一三五
 優勝劣敗……………一三六
 心の水平……………一三六
 感化と誘惑……………一三八
 高僧の感化……………一三九
 没我は結合の母……………一四三
 主従の情誼……………一四三
 感染……………一四七
 使ふ者使はるゝ者……………一四七
 心内の透視……………一四八
 人を見るの明……………一四九
 眼に涙……………一五〇

天下萬人の心……………一三四
 主將の法……………一五一
 思ひしより……………一五二
 恩と威……………一五四
 同情の外縁……………一五五
 以心傳心……………一五六
 心解體得……………一五七
 禪の問答……………一五九
 間、髪を容れず……………一六一
 氣合……………一六二
 機先……………一六三
 心越の膽力……………一六四
 拳骨和尚……………一六六

劔刃上の一句……………一六
心機……………一七〇

氣を以て勝つ……………一七〇

心の怪

心の變態……………一七三
相距る一步……………一七三
脅迫觀念……………一七五
憑依……………一七六
狐憑……………一七七
狐を叱す……………一七九
心、魔を生ず……………一八三
大岡裁判……………一八四
幽霊の正體……………一八五
幻覺と幽霊……………一八八
幽霊談……………一九九
夢……………一九九

夢と聯想……………一九四
結夢の因……………一九五
盲者の夢……………一九七
六夢……………一九八
夢の怪……………一九八
睡遊……………二〇〇
催眠と睡眠……………二〇一
人の天降りし話……………二〇三
五百弗の行方……………二〇七
千里相通ず……………二〇九
天眼通……………二一一
感應……………二二三

怪知るべきか……………二四一

靈魂

幽霊と靈魂……………二二六
靈魂の觀念……………二二七
死後の想像……………二二八
神界物語……………二三〇
スエデンボルグ……………二三二
地獄極樂……………二三四
地獄極樂の有無……………二三九
靈魂と死……………二四三

死は斷滅か……………二三四
因果相續……………二三五
死後の靈魂……………二三六
靈魂説の歸趣……………二三九
雨傘の用意……………二四一
妙好人……………二四三
生死透斷……………二四四
祝杯……………二四五

世の心

社會の心……………二四七
社會の心と個人の心……………二四八
國民性、民族性……………二四九

血より傳はる……………二五一
地と人……………二五一
國民性の徹底……………二五三

習俗……………二五四
 模倣……………二五五
 無意義の喝采……………二五七
 時好に投ず……………二五七
 流行の傳播……………二五八
 上の眞似……………二五九
 上る時は下る……………二六〇
 社會の四季……………二六一

社會の理想……………二六三
 相變る……………二六四
 成語の力……………二六五
 群衆の共通精神……………二六七
 暴動の鎮撫……………二六八
 非理法權天……………二六九
 戰爭論……………二七一
 戰爭と人心……………二八一

天地の心

天地の智識……………二八五
 無始無終……………二八六
 哲學の一瞥……………二九〇
 好譬喩……………二九四
 萬物心あり……………二九六
 六大周遍……………二九八

一心二門三大……………二九九
 天下一品……………三〇〇
 萬物一體……………三〇一
 あるべきやうわ……………三〇二
 一心法界……………三〇四
 一個のコップ……………三〇五

小、小にあらず……………三〇六
 一指世界を動かす……………三〇七
 萬物相關……………三〇八
 鐘と撞木……………三〇九

萬物通ず……………三一一
 天地の心と我が心……………三一二
 母を慕ふの情……………三二五

心と自然

自然の興趣……………三二六
 新天地……………三二七
 柳暗花明……………三二八
 花時風雨多……………三二八
 初夏……………三二九
 樹上の蟬……………三三〇
 月下の蟲聲……………三三一

時雨降る夜……………三三一
 菊花頌……………三三二
 年窮歲盡……………三三三
 靈覺……………三三四
 天地の經卷……………三三五
 他に贈り難し……………三三六
 自然を楽しめ……………三三七

達觀

洞然明白……………三三九

祕密病……………三三〇

隠すことなし	三三六
順逆の外に立つ	三三七
賣茶翁の自警	三三八
正念坊	三三九
花咲かぬ身	三四〇
安分の法	三四一
汁一つ	三四四
あきらめ主義	三四五
人格の權威	三四六
大處大觀	三四七
本末	三四八
明鏡を打破せよ	三四九
四智	三五〇
達人	三五二
他の奇なし	三五三
平常心	三五四
心の識得	三五五
何れにも置かざる心	三五七
陰晴共に可なり	三五九
借宅證	三五九
雅懷	三六〇
心の高さ	三六一
人のつらさ	三六二
心の忙了	三六三
心の餘裕	三六四
心に任す	三六六
附録 生活と心	三六七
現實問題	三六七
獨立生活の意義	三六九

人の心目次 終

生計の獨立	三七二
借金	三七三
貯蓄	三七五
三養生	三七六
精神の獨立	三八〇
公共の思想	三八三
生活を樂しめ	三八五

人の心

心の謎

怪しきは心

加藤 咄 堂 著

怪しきは心

「之れを有と云はむか、質礙なし、之れを無と云はむか、虚想を起す。強て名けて妙といふ。」怪しきは人の心。方か、圓か、黒か、白か。之れを索めて得る能はず、之れを探りて觸る能はず。然らば之れ假想の一物、もと有るなきか、有る無しといふも亦我が心。無か、無にあらず。有か、有

にあらず。之れを大にしては天地を包み、之れを小にしては一微塵裏に隠る。大か、大にあらず。小か、小にあらず。何物か、之れ心の體。何物か、之れ心の用。學者之れを究めて微に入り細を穿ち、研鑽日に進みたりと雖も、尙ほ靈妙測り易からざるものあり。終に憮然として神祕の域に没入するを歎ず。「奇しきは海、海よりも奇しきは空、空よりも奇しきは人の心。」心の波は青海原よりも其の去來を激しくし、心の雲は大空よりも其の變轉を急にす。昨の心、今の心にあらず、今の心、亦當來の心たるやを知らず。刹那に起滅し、瞬時に移動す。移り行くはじめも、はても白雲の實に怪しきは人の心なり。人生は此の心の集團。過去の歴史は此の心の發現。現在の世態は此の心の葛藤。人生の謎を解かんとす。先づ此の心の謎を解かざるべからず。

心の意義

解き難き心の謎を解かんとするものも人の心なり。研究の目的物も心にして研究せむとするものも亦心。注意は二面に分れて、心の真相得て知るべからず。心海波靜なる時、徐ろに自己、自己を省る。其の知り得る所は自己の一面のみ。幸に心あるものは我のみにあらず。他人心あり予之れを付度す。されど付度は依然として付度にして實物の捕捉にあらず。誤解あり、獨斷あり。此に於て近世の心理學は、先づ心的現象を惹起する生理的條件に重きを置きて、實驗の立脚地より之れを探らむとす。しかも心其者は得て捕捉すべからず、漸く究め得る所は其の用にして其の體にあらず、現象にして實體にあらず。心の研究は尙多くの疑問を吾等の前に展開し、解き難き謎は、久しく人の世の惑ひの種となりぬ。されば謂ふ所の心其者の義

に就ても頗る多義あり。索問には心は五臓の專精といひて、心を胸腔内に存して囊状を成せる心臓と同視し、荀子には心は形の君なり、神明の主なりとして、吾等が身體を支配するの主體と見、邦語「こころ」はこころの約といひ、其の變轉常なくころくと移動するに基くといふは附會の説なるべきも、心臓のこつくと動く所より出てたりといふは傾聽すべき價値あり。人心に激變の生じたる場合、心臓の鼓動甚しくなるより心は常に心臓と混同せられ、英語のハート(Heart)も亦心と心臓との兩義に用ひらる。

大なる心

心を論じて其の本體に入る。朱子は衆理を具して萬事に應ずといひ、榮西禪師は「大なる哉、心や。天の高き極むべからざるなり。而して心は天の上に出づ。地の厚き測るべからざるなり、而して心は地の下に出づ。日

月の光、踰ゆべからざるなり、而して心は日月光明の表に出づ。大千沙界極むべからざるなり、而して心は大千沙界の外に出づ。其れ太虚か、其れ元氣か。心は則ち太虚を包み、而して元氣を孕むものなり。天地、我れを待つて覆載し、日月、我を待つて運行し、四時、我を待つて變化し、萬物、我れを待つて發生す。大なる哉や。吾已むを得ずして強て之れを名くるなり」といふ。

心と我

眼を開けば天地我が前にあり。眼を閉れば忽焉として無し。心を走すれば天の高き地の厚きも考ふべし、心を止むれば寂然として萬籟静かなり。我あるが故に物あるか、物あるが故に我あるか。心によつて萬法生ずるか、萬法によつて心成るか。深奥なる哲理此に萌し、精緻なる論議此に起る。

吾等の心、近く考ふれば日常の左視右視、遠く考ふれば源を天地と共にし量(りやう)を乾坤(けんこん)と同じうす。

四種の分類

心の研究(けんきゆう)は古來(こらい)佛者(ぶつしや)の苦心(くしん)せる所、之れを四種(よんしゆ)に分類(ぶんる)し、一(ひと)を肉團心(にくだんしん)とす。肉體(にくたい)と直接(じかっけつ)に關聯(くわんれん)せるもの、彼のハート(Heart)と云ひ、マインド(Mind)と云ふ、これに該當(がいたう)すべきか。二(ふた)に緣慮心(えんりょしん)。これ心に起(おこ)る所のもの英語(えいご)のシンキング(Thinking)、ソート(Thought)の如(ごと)き之れに當(あた)るべきか。思(おも)ひ、考(かん)への如(ごと)き此(こ)の中に屬(ぞく)せしむべし。更に第三(だいさん)に集起心(しゆしき)なるものを置く。これ心象(しんしやう)の統率(とうそつ)者(しや)、所謂(すゐい)阿賴耶識(あらいやしき)なるもの。而して四(よ)に堅實心(けんじつしん)を説(と)いて宇宙(うちう)の本體(ほんたい)たる眞如(しんじよ)と同一物(どういつぶつ)とし、我が心の秘奧(ひおく)には天地(てんち)の大靈(たいれい)と脈絡貫通(みやくらくくわんつう)するものありとす。單(たん)に心(しん)といふ其(その)義(ぎ)や多端(たたん)端(たん)。若(も)し其(その)れ生前(せいぜん)

死後(しご)に互(たが)りては靈魂(れいしん)なるもの想定(さうてい)せられ、魂魄(こんぱく)なるもの推測(すいそく)せらる。而して之(これ)を想定(さうてい)し推測(すいそく)するものも亦(また)吾等(われら)が心(しん)。所詮(しよせん)、心(しん)は一個(いこ)の怪物(くわいぶつ)たるなり。

心の波

ロック(ロック)いふ、吾等(われら)の心(しん)は元來(もとより)白紙(はくし)の如(ごと)きものにて、生來(せいらい)何(なに)の智識(ちしき)も有(あ)りざりしが、經驗(けいけん)の功(こう)を積(つ)みて此(こ)の白紙(はくし)に諸種(しよしゆ)の智識(ちしき)を印(いん)するに過(あ)ぎずと。吾等(われら)の心(しん)の働(はたら)きの經驗(けいけん)に待(まち)つあるは疑(うたが)ふべからず。試(こ)みに眼(がん)、耳(じ)、鼻(び)、舌(ぜつ)身の五官(ごくわん)を缺(けつ)如(ごと)きものを想像(さうざう)し見(み)よ。彼等(かれら)の心(しん)には色(しき)なく、聲(こゑ)なく、香(かう)なく、味(あじ)なく、而して觸(ふ)なく、何(なに)の智識(ちしき)か之(これ)を得(え)べき。されど吾等(われら)の心(しん)の働(はたら)きを外界(ぐわいがい)より受け來(き)るものゝみとするは、疑(うたが)ふべし。吾等(われら)の心(しん)には其(その)の外界(ぐわいがい)より受け來(き)るものを整理(せいり)し統合(とうごう)する心(しん)の働(はたら)きあり。そのみならず、「片乳房(かたちちぶ)さぐるや慾(よく)の初櫻(はつざくら)」誰(たれ)れ教(しよ)へずとも、餓(う)ゑては食(た)を求め、

渴しては飲を求む。吾等の心には内より起るものあり、外より來るものあり、内外相應して其の用を爲す。時に或は内の外を制して、心此にあらざれば食へども其の味を知らざることあり。時に或は外の内を制して、茫然自失することあり。其の外より來るものに強弱あり、内より起るものに強弱あり、強は弱を併せ、弱は強に敗る。心内の生存競争は、渡る世間の優勝劣敗よりも甚しく、朝より夜に至り、夜より朝に至り、心の波のたゞぬ日はなく、意識の流の止ることなく、其の強きものは外面に表はれ、其の弱きものは内面に潛み、潛めるもの亦機に乗じて表はれ、表はれたるものも亦劣敗の地位に落ちて潛む。無常暴流の如き人心、刹那刹那に生滅しつゝも續け行く状態は、川の流の少時も住まらずして、しかも同じ流たるが如し。幼時の我は今の我にあらざると雖も、幼時の我と今の我と全く没交渉なるにあらず。業平の中將が「いよ言問はん都鳥」と咏ぜし時も、汽船浮嶋

の夢を驚かす今も、隅田の川に二つはなけれど、其の流は既に去つて尋ねべくもあらざるは、不變の中に變化あり、變化の中に不變ある我が心にも似たらずや。永久の河上、生滅の波、心の波の如何に騒ぐとも、皆これ我を離れたるにあらじ。心に變化なくんば我に進歩なく、我に不變なくんば我が心何を以て他の心と分たむ。心を見んとするもの此の二面觀察を忘るべからず。

理を以て測るべからず

我は心の主體なり。心象の如何に亂起するとも我は能く之れを制御し、意識の如何に複雑なるとも我に統一の作用あり。意識の統一、これ實に我の我たる所以。而して此の我、果して能く諸種の心象を制御し統一し得るや。此の我を惑はし、我を味ます強烈なる觀念の起ることなきか。眞理は

我の首肯せざるべからざる所、而も此の眞理に對しても反抗を試みんとする心情なきか。非眞理は我が否定せざるべからざる所、しかも之れに曲解を試みんとする心なきか。人は日々死に近づきつゝあるは否定すべからず。されど吾等は斯く思念する能はざるものあるにあらずや。飲酒の衛生に害あるは、曲解せんとして曲解する能はざる所。されど「酒は憂を拂ふの玉帚」と稱し「百藥の長」と云ふことなきか。「夢とあきらめや何でもないが、そこが凡夫てねえあなた」これ人情の常態。「親死ぬ子死ぬ孫死ぬ」ほど目出度ことはなし。仙崖和尚、曾て此の語を書して人に與ふ。其の人いふ、不吉にして用ひ難しと。和尚笑つていふ、これ人生の順序なり、これより目出度はなし、若し之れに反して「孫死ぬ子死ぬ親死なば如何」と。理は則ち然り、しかも斯か思ひ能はざるは我が心にあらずや。或る人酒杯を手にせず、人あり之れに勸めていふ、百藥の長なり何ぞ飲まざると。其の人

いふ、我れに病なし何ぞ藥を要せむと。又勸めていふ、憂を拂ふ玉帚なりと。其の人又いふ、我に憂なし何ぞ拂ふを須むんと。理に於て争ふべきことも更に曲解を其の間に容れんとするも亦吾等の心にあらずや。

理に服して情に枉げず

理に服しても、情に枉げず。否、吾等の心は理よりも情に動き、堂々たる論議も、其の裏面には情の背景あり。善いと思ふ心先ちて其の理由を組立て、悪いと思ふ心先ちて其の智巧を逞うす。結論先づ情に成つて理智を驅りて之れが説明の用たらしむるは、堂々たる哲學者の人生觀に於ても、其の人の性格の其の所説を左右する大なるを見れば、吾等が一言隻句の理よりも情の力多さを看取し難からず。理智の明は心を照せども、情の盲動は更に力強く、吾等の心意生活の大部分は實に此の盲動的なる情によつて支

配せらる。愛憎好悪、これ心的活動の主力、理を以て判定すべからざるもの多し。何人か一個の美人、兇漢に殺されると聞いて哀なりと感ぜざるものあらむ。されど若し數萬の大軍一擧にして屠られ盡くしたりと聞かば、何人か壯快を叫ばざらん。一少女の死にして悲むべくんば、壯丁數萬の死は更に／＼悲むべきにあらずや。車夫に一錢二錢の賃錢を値切る紳士が、旗亭の纏頭に數十金を惜まざるは何ぞや。これ情なり、理にはあらず。

我執

八萬四千の煩惱は我執を本とす。我執とは僅にこれ五尺の短身、五十年の生命を保持する此の我なるものに執著するの妄想なり、之れに執著するが故に、命惜しさの臆病未練、生活維持の奸策惡計。我を擴張せんが爲の財慾名慾、慳貪の念、此に萌し、瞋恚の情、此に動き、更に種族保存の生

殖慾(即ち色慾)の之れに加はつては、戀愛となり、嫉妬となり、愛憎好悪の妄執ますます／＼甚しく、愚痴の迷雲、理智の光明を覆ひ、三毒の猛火、心根を焚燒しては心象錯綜、或は利の爲には名を忘れ、名の爲には利を顧みず、或は名利の爲に戀を離れ、戀の爲に名利を棄て、甚しきは一命をも其の犠牲たらしむ。恐るべきは我執の一念。而して情は常に深く根柢を之れに有し、自己中心の思想は、如是に觀じ得べき事象も如是に觀ぜず、理を枉げ智を矯めんとす。

自己中心

山出しの下男權助、禮儀作法の心得もなく、旦那様の茶碗にて、水をガブ／＼呑むに、下女の見兼ねて、「權助どん、それは旦那様のぢやないか。」

と注意しても權助は一向平氣に、

「旦那様とて乞食ぢやあるまいし。」

と。笑話以て人情の自己中心を語るべし。或る人、象牙の吐月峰を得て、非常に大事がりしが、やんごとなき來客に、惜しさうに之れを出せしを客人は何心なく、烟管で強くカチンとはたきしに、主人思はずハツと云へば客人は、

「御主人御心配に及ばぬ、烟管は何ともござらぬ。」

同一事象も、主客各々自己の思念する所によりて觀察を異にす。如是の相を如是に觀じ能はざる多くは此の類。

心海波荒し

心波平靜の時尙ほ且つ自己中心の情を以て如是の相を如是に觀する能は

ず。況や心海波荒れて怒濤天に漲る時に於てをや。心學道話は好個の説話を吾等に提供す。夫婦暮しの菓子屋、何の間違からか、大喧嘩を始め、店頭に入立するをも顧みず、殺す、殺せの大騒ぎに、家主、驅けつけて、止むれども聽かず、夫は妻の髻を攫み、妻は夫の足に食ひつくに「かほどまでに止めても止まらねば致方なし、喧嘩は勝手に致さるべし」と、つかつかと店頭に出て、有り合す菓子を手攫みにして、

「サア〜子供達、これを進げるほどに、ゆる〜と見物なされ。」

と、惜げもなく、差出すに、妻の先づ慌て、「あれ〜」と指す。亭主驚きて、

「モシ〜其のやうなことをせられては、明日から私達が商賣が出来ません。」

といふに、家主は

「イヤ〜おまへ達は、殺す殺せの大騒ぎ、殺されば命はなし、人を殺せば又命がない、明日から誰が商賣をするぞ、せめて御前方の生前に菓子でもやつて置けば少しは功德になるであらう。」

と、又もや遣らんとするに、今までの夫婦喧嘩はバタリと止みて、夫婦ヒタ謝りに謝りて以來を慎む由、誓ひしといふ。こは最後に反省の餘地を存せしものなれど、怒火心頭に起り、理非正邪を辨ぜざるの時、直に事を行つて取り返しのつかぬはめに陥りし例も亦少からず。京都の櫛笥大納言の息女の仙臺侯へ嫁せられしあり。侯は名におふ奥州の太守其の豊かなるは云ふまでもなし。大納言は位こそ高けれ、家いと貧しければ、母君より家事のことなどくどくどと書きて、少しの合力を頼む由の手紙來りければ人に見らるゝも恥しと、深閨人なき時、静に之れを讀まれしに、思ひもかけぬ殿の御入り、驚いて隠さんとせしを、怪しと僻み見られし殿の、其手

紙見せよと迫らる。見すれば何程のこともなかりしに、恥しとの一念に見せじとするを、さては密夫よりの艶書かと、殿はます〜怪みて取らんとせらるゝに、取られては家の恥、身の恥と、慌て、口中に押し込まれしを、短氣の殿は瞋恚に眼味みて「不義者」との一喝と共に抜く手も見せず、斬り殺して引き出し見れば、母よりの無心状。悔いても及ばぬ最愛の妻一人瞋恚の犠牲とせられし一話は、一念起動の恐るべきを語るものにあらずや。

天邊一輪の月

天邊一輪の月、見る人の心に任しては、

川船やよい茶よい酒よい月夜 (芭蕉)

と、銀波漾々たる處に之れを賞づるものあれば、

花ならば探りても見ん今日の月 (失名)

と、身の盲目を啣つもあり。「月見れば千々に物こそかなしけれ」と嘆くもあれば、「此世をば我が世とぞ思ふ望月の」と豪語するもあり。

月こよひ悪七兵衛と名乗りけり

と、影の清さを洒落るゝもあれば、

戀しくがツイ癪となる、胸にさしこむ窓の月 (俗 語)

と、情緒纏綿たるあり。又

雲にたゞこよひの月を任せてん

いとふとしても晴れぬもの故 (西 行)

と達観せるもあり。千江水あり、千江の月。悲喜哀樂、唯だ其の心のみ。

變り易きは心の常

深奥なる哲學者の人生觀は、よし其の萌芽を其の人の性格に出すとも、

理路整然として容易に動すべからざれども、世相に對する庸流の觀察ほど變り易きはなし。順境には樂天論者となり、逆境には厭世論者となり、大晦日の厭世論者、元日に樂天論者となり、失意には人生を悲觀し、得意には人生を樂觀し、救はれては「渡る世間に鬼はなし」と喜び、欺かれては「人を見れば泥棒と思へ」と憂へ、一杯の酒に、厭世論者一轉して「酒のめば何時も心は春めて借金取も鶯の聲」との樂天主義となる。氣分によつて變じ、境遇によつて動く、定め難きは人の心。何事も自己を中心として出發し來る。

色と慾

「浮世は兎角色と慾。」之れを科學的に翻譯すれば慾は即ち自己保存にして色は種族保存なり。冷かに見れば人生は此の二大目的のために活動し、人

の心はたゞ此の二によつてのみ動く。汚らはしきもの、忌はしきものと見
得べけんも、人は唯だ此の慾望にのみは生きず、人生は唯だ此の目的のた
めの競争のみにあらず。否、此の目的のためにも協同生活を要し、博愛仁
慈を求む。博愛仁慈の念なくんば人生は宛然たる修羅場。協同の生活なく
んば一日も生存を保持し難し。協同生活は自己を制限し、博愛仁慈は没我
の心より成る。自己は唯だ取らんと欲す。しかも與へずんば取る能はざる
は自己の制限なり。自ら我が爲を計らんとす。しかも他の爲に身を犠牲に
供するは没我の顯現なり。人に此の心あり。人情初めて美はしく、世相も
亦一段の色彩を帶ぶ。「情は人の爲ならず」これもと自己中心に出づと、功
利主義者、常に此の説を保持すれども、身を棄つるもの何ぞ其爲を計るの
自己あらんや。人心の秘奥に潛める同情の迸發しては、自己を忘れて他を
救ふ。これ後天的に附加せられたるものにあらずして、實に先天内容の美

はしき心。人の神に近き所以、一に此の心に存す。身を殺して仁を成すの
高義は獨り人類に於てのみ見得べきことにあらずや。

同情の美

同情は社會結合の楔子。されど、こも亦自己を中心として發足す。同情
の最も痛切なるものを親子の關係とす。燒野の雉子、夜の鶴、何れの處にか
子を思はぬ親やあるべき。親は子の爲に隠し、子は親の爲に隠す、直さこ
と此の中にあるが人情の美趣。而して之れ最も自己に近接せるもの、更に
兄弟の相愛に至つては、情もとより親子の如くならずと雖も、血は水より
も濃し、同情の強弱亦他人と等しからず。夫婦はもと他人、合して一體
となるや、戀愛の之れが媒たるや云ふまでもなけれど、其の和合を美なら
しむる所以のものは此の同情に外ならず。殊に老いては戀愛の情衰ふれど

も、半生共棲の追懐は更に兩者の同情を深からしむるものあり。家庭は此の同情に結ばれ、相互に自己の幾分かを讓歩する中に圓滿を計り得べし。郷黨隣里との交も亦此の同情によつて美はしく、進んで國家社會を形成するや、吾等は之れによつて生命、財産、自由の安固は保障せられ、之れによつて獲得したる權利少からざれども、亦之れによつて負はされたる義務の更に大なるを思はざるを得ず。權利は自己の擴張たり得るも、義務は自己の制限なり、沒我なり。此の沒我あつて公共の利益は企圖せられ、此に美はしき國民道德となり、終には其の郷國の爲には自己を沒却して願みざる殉國の芳躅を貽す。若し夫れ此情の國土を超越して、普く世界の人類に及ぶに至つては、博愛の精神は徹底し、仁慈の美は窮極に近し。明治天皇の

四方の海皆はらからと思ふ世に

など波風のたちさわぐらむ

一首、世界を感動せしめし所以のもの、實に此の人類相愛の美に發したる金聲玉振たるに由る。相争へる人類の一面には此の美はしき同情の理想あり。此の心一切の生物に及びては、空飛ぶ鳥、野を驅ける獸、さては眼前の一小蟲にも、一茶の

我と來て遊べや親のない雀

やれ打つな蠅が手をする足をする

寝返りをするぞわきよれさりとす

となりて、其の人格を想望せしめ、峰頭の松、路傍の花に及びては、詩人の錦腸を動かして、天地を美化し淨化す。釋迦が慈悲を提唱し、孔子が仁を教示し、基督が愛を宣傳するもの、もと人の心の醜所惡所を照破せんとするものなりと雖も、其の慈悲といひ、仁といひ、愛といふもの亦實に人心秘奥の要求より叫び出されたる聲に外ならざるなり。誰か人心を醜と呼

び、汚といふ。相争へる人の心には確に此の美所あり淨所あるなり。

欺かざる心

人の心の美所淨所は之れのみならず、人は皆眞を求むるの心あり。如是の如きを如是に知らんとする人心の慾求は、虚偽を憎み、誑詐を嫌ふ。時に名利の爲に味まされて、虚偽を行ひ、誑詐を事とするも、之れたゞ其の外面の糊塗にして、内心には詐るべからざるものあり。此の詐るべからざるもの發して、自ら其の糊塗を剝して欺くべからざる我が眞相を暴露す。犯罪者の巧妙なるもの再犯加重の刑を恐れて、偽名を以て刑を受け、初犯の如くに装ふ。炯眼なる司獄官の之れを洞察して、彼れの不意に乗じて突然其の本名を呼ぶ。囚人此の一刹那、考慮を容れず、「ハイ」と應じて、直に化の皮を剝さる。此の考慮を容れざる一刹那は人心秘奥の欺くべからざる

るものあるを證するにあらずや。西洋の御伽噺は、一條の笑話を傳ふ。

或る小さな村に、一人の寡婦が大切に飼うて居つた鷺鳥を盗まれたことがあつた。何うも村の者の仕業に相違ないといふので、其の調べ方を御寺の坊さんに頼むと、其の坊さんは、早速、村中に相談したいことがあるから明早朝村の者は皆寺に集つて呉れと觸れ出した。何事か解らぬから村の者は皆其の寺に集ると、坊さんは一座を見渡して、

「これて村の者は皆揃つたか。」

といふと、

「ハイ、皆揃ひました。」

坊さん不思議さうに、

「まだ鷺鳥を盗つたものが来て居らぬ。」

此の一刹那一人の男は、

「ヘイ此處に居ります。」
欺くべからざる心裏の聲は、自ら詐らんとする作略を躊躇して公衆の面前に躍出す。世に人心の機微ほど面白きはなし。

人智の力

眞を求むる人心の要求は、内、理智の光となつて情意の暗黒を照らし、外、發明の力となつて、自然の壓迫に抗し、歩々人格を向上し、文明を發展す。原始野蠻の狀態より今日文明の生活に入れるもの、一に此の理智の力なり。人といへば僅に同一血族のもののみ、世界といへば我が棲む部落のみと思へる昔より、辿り辿りて五大洲を究め、四海兄弟の理想に入り、我を遮るの山は之れを拓き、我を妨ぐるの水には船を走らし、徒歩の自由より脱して鐵路一條夢を載せて通ずるの利便を生み、波のまに／＼運々

として浮びし獨木舟は昔話となりて、汽笛一聲萬里の波濤を蹴つて走る航海の、尙ほ便ならずとせらるゝ世と進みしも、人の力なり。天地一物を増さず、宇宙一物を減ぜず、しかも古今其の便否を異にせる所以のものは、たゞこれ人智の進歩のみ。増さざるものを用ゐて其の利を増し、減ぜざるものを用ゐて、其の害を減ず。偉なる哉、人、天地に介在して此の妙を演ず。大なる哉、智、宇宙の幽を闡き、玄を究めむとす。

知と不知

されど、知り得たる所は濱の眞砂の一粒に過ぎずして、不可知の境は廣く其の前後を掩ひ、誰か又人智の大に誇らむ。正確に知り得る所は眼の視、耳の聽き得る範圍のみ。経験は智識の母、経験未到の地は之れ理智未到の境、其の経験なるもの、もと吾等が五官に接觸する範圍に止る。五官

の中、鼻舌身は低級官能と目せられ、遠境を察する能はず、味と觸とは直接近似せざれば知る能はず、甘といひ辛といふ皆舌頭に上りて後のこと、堅といひ軟といふ悉く身之れに觸れて知るのみ。香は稍遠さを受くると雖も、もとより眼耳の比にあらず。眼耳は高級官能と云はる。しかも其の見得る所限あり、聽き得る所も限あり。學者は、吾等の視覺に入るべきエーテルの振動は一秒時に四千億以上九千億以下に止り、聽覺に入るべき音響も亦一秒時に三三乃至六九六〇〇四の振動に限られ、一六乃至四〇、〇〇〇に止り、最も大なる音響と、最も小なる音響とは之れを聽く能はずといふ。限ある感覺を以て接觸する吾等の經驗に限あるは云ふまでもなく、其の經驗を素材とせる智識に限りあるも亦争ふべからず。

更に又其の吾等の感覺の心の中に入るものを檢するに、それは視聽等の全部にあらずして真に一小部分のみ。

注意と不注意

試に腕車を驅りて路上を過ぐるとせよ。路傍の家屋、電柱、行路の人、皆我が目に映じ、心に入れど、忽ちに流れ去つて止らず、其の深く心に入るものは、刺戟の殊に我が心を動かすものか、若くは自ら注意を其の方面に向けたるもののみ。意を注いで之を見れば其の者のみ明白に心に入り、刺戟甚しければ、殊に我が心を惹く。其の外界より來るものを受動注意とし、内部より起るものを發動注意とす。フト美はしき店飾に氣がつくは前者にして、此邊に書店はないかと探しつゝ氣のつくは後者なり。此の注意の場合には前滅後生、前滅後生と須臾も止ることなく流れ行く心の波の殊に高調となりて、明白に意識せられ、他は低流となりて其の下に潛み、觀念の競争に於て此の觀念に優勝者の地位に立つて、他をして劣敗者の地位

に下らしむ。心理學者テイチエナー氏はいふ、

- 一、此の觀念は同時に現はれたる他の觀念よりも一層明白なり。
- 二、此の觀念は他の觀念より一層永く持續す。
- 三、此の觀念は他の觀念より一層記憶せられ易し。

と。鹿を逐ふ獵夫は山を見ず、其の心、鹿にありて、山にあらざればなり。山は意識の下に潛み、鹿は其の上に現はる。注意は一より他に向ひて變轉し、心の波は上となり下となりて流れ行くも、吾等の經驗となるものは、多く此の一たび注意せられたる事項に存し、其の以外のもは意識の下層に沈み、時に偶然の事情によつて心の表面に現出することあるも、多くは記憶の外に放抛せられ、經驗の資料たるに於て缺くるあるに至る。

直観と思考

吾等の智識は後天的經驗を素材とし、これを我が心裡の先天的形式に取り入れて成立するものにして、之れに直観と思考との別あり。直観は感性により思考は悟性によるものとし、感性により取り入れたるものを此の悟性によつて或は關係を定め、或は其の質量を整へて完全なる智識となる。心内の作用、精緻を極めたれど、もと經驗による。而して此の經驗に限りありとすれば、吾等の知る所の頗る尠少なるや疑ふを要せず。天地は大にして、人智は小、萬物は多くして知ることや少し。しかも此の僅に精確に知り得たることをも精確に主張する能はざるが人心の弱點、權勢の前には正理を抛ち、情火燃えては智水も亦消えざるを得ず。

胡魔化し論法

我執は理を非に枉げ、利慾は理なきに理を造る。昔、或る男、辯論の術

を學ばんとて、當時有名なる大家に就き、願くは議論に敗を取らざるやう教へたまへと。師、諄々として論理を授けしに、其の男、學び終つて謝儀を出さず。師、勃然として之れを法廷に訴ふ。其の男辯じていふ、我若し勝たば、もとより支拂ふの義務なし、若し敗を取らば未だ約束の如くに至らざるものなれば支拂ふの義務なしと。一應の道理はあり。其の師、答へていふ、我れ勝たば支拂を受くる権利あるはいふまでもなし、若し敗を取らば之れ約束の如く彼れに教へ終りたるものなれば支拂を受くべしと。理はこゝにもあり。如何様にも立つ理窟。自分勝手の論法、詭辯、強辯、舞文、曲筆、人生の葛藤、多く此の中より生ず。

全

其の人の父を箱の中に隠して、問うていふ。

「汝は此の箱の中のものを知れりや。」
もとより知る筈なれば、
「知らず。」

と答ふ。論者笑つていふ。

「此の箱の中にあるは汝の父なり。汝は此の箱の中のものを知らず。之れ汝の父を知らざるなり。」

と。卒然として之れを聞けば、論理整然たるものあるが如きも、胡魔化しは其の中にあり。箱の中の何たるを知らざりしは事實なり。されど父を知らざるにあらず、父の其の箱の中にあるを知らざりしのみ。昔、希臘に詭辯の流行したる時代、此の種の論法多し。曾て人あり、一種の謎を提供していふ。

我に兄弟なし、汝の父は我が父の子なりと、然らば其の人と如何の關

係あるか。

と。兄弟なしの語に没頭し、汝の父は我が父の子に混亂せられ、終に要領を得ず。其の人警めていふ、人の言語に迷ふ多く此の類。これ「我は汝の父なり」といふと何の異なるかと。然り之れ同一語、かゝる明白の事實も吾等は常に其の解決に苦みつゝあるなり。禪家、初心の者に示していふ。

二人行く一人はぬれぬ時雨かな

と。二人行きて何が故に二人濡れざると没頭すれば、千條萬條、誰か二人ぬれぬといふ。明かに一人は濡れぬ即ち二人とも濡るゝことを表明したるにあらずや。迷ひ易き人心。論に迷ひ、理に迷ひ、言に迷ひ、句に迷ふ。此の言句を躡跳したる所に禪の妙趣は存し、此の論理を正うする上に論理學は成立す。

迷ひ易き心

智、既に迷ひ易し。況や之れに指導せらるべき情をや。智に真非の衝突あり、孰れを真とし、孰れを非とすべきか。情に愛憎好惡の衝突あり。理智の衝突は、其の簡單なるものは經驗によつて真非を判ずべく、稍複雑なるものも論理の斧鉞を以て解決すべく、唯だ經驗不到の境に於ては、推理の力も弱くして其の判定に苦むもののみなりと雖も、情に於ては、もと其の人の主觀に基くが故に、簡單なるものといへども、一は愛し、他は憎む。孰れを可とし、孰れを不可とすべきなし。一個の器物に對し土なりや木なりやとの争ひは、經驗によつて判ずべきも、これを好むものと好まざるものとの争ひは、判ずべき一物なし。智の迷ひは去るべきも、情の迷ひは去り難し。而して此の智と情と又相争うて人心の紛糾一層を極む。

人心と道心

人の心は智と情との衝突の外に、倫理的觀念を以て分類せらるゝ、人心と道心との競争なり。人心は自己中心の思想に胚胎し、道心は没我の精神に萌す。一は人慾路上の産物、他は天理路上より來るもの。一は氣質の性に基き、他は本然の性に出づ。一は惡に趣向せんとする心にして、他は善に趣向せんとするの心。同じくこれ智、前者に従へば邪智となり、狡智となり、奸智となり、後者に従へば正智となり、眞智となり、良智となる。等しくこれ情、前者に従へば嫉妬となり、猜忌となり、後者に従へば慈愛となり、同情となる。忿怒は人の以て惡と爲す所、しかも道心に萌せば、嚴父の笞杖の如く、以て他を教化すべく、仁慈は以て人の善とする所。しかも人心に起れば、利を得るの手段にあらずば、名を賣るの偽善、却て嘔吐を催

さしむるものあり。善惡といひ、邪正といひ、是非といひ、曲直といふ皆此の兩者の戦ひによつて決せらる。

○ 鏡にぞ心は似たるしかはあれど

○ かどみはかげを止めやはする (小澤蘆庵)

○ うしといひあはれと思ふ種なくば

○ 世にことのはもしげらざらまし (村田春海)

心の亂

心内の戰場

吾等が一の行爲を現出するまでには、心内に幾多の波亂あり、紛擾あり、怒火心頭に起つて人を殺さんとす。怒りの心象強烈なる場合は、他は蟄伏して之れと相争ふに隙なきも、少しく心を静めては、人を殺せば自らも亦殺されざるべからずとの因果關係の想到せられて、理智の水、之れを消さんとするあり。止まらんか怒火の尙ほ燃ゆるあり。行はんか、智水之れを止むるあり。一旦の怒りはこれ人慾の私なり。私に人を殺す、其の惡殊に甚し、寧ろ之れを許して彼れをして反省せしむるの優れるに如かずとの觀念、心の奥底より油出せんか、道心と人心と亦相争ふ。此の間に煩悶

あり、懊惱あり。此の中を思慮といひ、思慮の中に群り起る諸種の心象中最も強烈なるもの優勝者の地位に立つて他の心象を征服して、こゝに決意す。此の決意によつて終に實行に達す。即ち其の思ひつき即ち動機より實行に至るまでの間は、心内の戰場にして、既に實行の手を下したる時は勝敗の既に決したるの時なり。

呼應して立つ

殆ど群雄割據の状態を以て吾等の心内に蜂起する諸種の觀念は、悉く單獨孤立のものにあらずして、各々其の部屬を引率し、同類を糾合し、相呼應して勢威を張る。所謂觀念聯合なるものは是れ。先に人を殺すの因によつて、殺さるゝの果に想到せしが如きは此の類にして、之れに接近と類似との二あり。花といへば芳野を想ひ、芳野といへば南朝を想ひ、南朝といへ

ば楠正成を想ひ、楠正成といへば湊川を想ひ、湊川といへば神戸市を想ひ、月といへば石山寺を想ひ、石山寺といへば紫式部を想ひ、紫式部といへば源氏物語を想ひ、源氏物語といへば其の註釋者を想ふ如き、若くは鐵砲を見て兵士を想ひ、兵士を想うて戦争に及び、戦争を想うて慘禍に至るが如きは、場所又は因果等の關係の接近より來るものにして、落花を見て雪を想ひ、雪を想うて綿に至り、ナポレオンを想うて豊太閤に至り、豊太閤を想うて猿に至る如きは、類似より來るの聯想なり。此の接近と類似との兩聯想相互錯綜して相呼應し、一の觀念起る毎に他の觀念も頭を擡げんとし、他に反對聯想なるものあり。兩極端は相似たるの理か。賢といへば愚を想ひ、白といへば黒を想ひ、君子といへば小人を想ひ、美人といへば醜婦を想ふの類亦心内に崛起し、一念萌す毎に諸種の聯想、心頭に競ひ起りて、左顧右盼、何れに定むべきかを苦ましむ。

心の纏

條理整然たる心の糸、相互に聯絡し、貫通して少しも亂れざるの時は、心内太平の状態。一たび纏れ出しては、結ばれ解けぬかた糸の繰り返しても正し難く、所謂心緒亂れて糸の如きもの、快刀一振之れを斷つ勇なくんば、其の秩序は終に恢復し難し。其の解き難さや、多く人慾の私の纏綿するに由り、之れを解くや、道心より迷り出てたる金剛の智劍によらざるを得ず。

心王

道心と人心との争ひ、善惡、邪正、曲直、是非の對陣、吾等は先づ兩軍の陣容を見ざるべからず。人の心象を分類せるもの、唯識論の如く精細な

るはなし。唯識論に於ては心を分類して心王と心所との二とす。心王は即ち心の支配者にして、之に入あり、阿頼耶識、末那識、意識、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識とし、心の門戸を守る眼耳鼻舌身は外界色聲香味觸を了別し、其の受附ともいふべき意識は此等の受附たるものに對して諸種の觀念を生ず。これに五俱と獨頭との二あり。五俱の意識は又明了意識ともいひ、直接に外界より享受して起るものにして、常に眼耳鼻舌身等と關聯すれども、今は直接に關聯せずとも曾て享受したるものによつて想起する記憶追念(これを獨散意識といふ)又は夢(夢中意識)の如き、或は坐禪中に起る意識(定中の意識)等を總稱して獨頭といふ。しかもこれ未だ不斷に思慮する心の働きにあらざり、此の意識の奥底に潛みて自我によつて統一して思慮を續くるものを末那識といふ。末那は梵語にして思量の義、又これを我見識とす。「唯識大意」に云く、

末那識は凡夫の心底、常に濁りて前の六の心は清く起る時も、我が身、我が物といふ差別の執、失せず、心の奥いつとなく、酔ふが如くなるは、此の末那識のあるに由りてなり。
 潜在状態にある自己意識ともいふべきか。尙ほ此の奥に潛めるものを阿頼耶識とす。阿頼耶は藏の義。「唯識大意」に云く、
 阿頼耶識は即ちこれが一切諸法の根本なり。諸法の種子を攝して持てる心なり。此の心なくんば諸法の種子をば誰かこれを持たん、持ち攝する所なくんば何に由てか生ぜん。
 といひ、此の心に本有の種子と新熏の種子とあり。本有は即ち先天的のものにして、生れながらに吾等の持ち居る潛在的のもの、之れが顯勢的となりて末那以下七識の活動となる(これを現行といふ)。此の活動によつて又新たなる種子を阿頼耶に熏ず、これを後天的なる新熏の種子とす。此の後

天的なるもの加はつて前七識の現行となり、現行より又種子を生じ、種子生現行、現行生種子と窮りなく輾轉すと説くが故に、出ては入り、入りては出づる其の本は此の阿頼耶にありて、同じく心王といふと雖も、其中の支配者たるべきものは此の阿頼耶にして、末那は大老職たり、意識以下は老中たり、若年寄たるに過ぎずして、更に小にしていへば、阿頼耶は主人、末那は番頭、意識は受附、眼耳鼻舌身は門番たるべきか。

心所

唯識論、心所を分類して遍行、別境、善、本惑、隨惑、不定の六とす。遍行とは善心にも、悪心にも、又善惡に屬せざる心にも通ずるものにして、之れに五あり。

- 一 觸 心をして外境に觸れしむる作用。

善にも、惡にも、道心にも、人心にも、此の五は遍く行はる。別境とは此の如く善惡一切の機能と共同的に起るものにあらずして、個々獨立して起る作用をいふ。之れに五あり。

- 一 欲 希ひ求むる心の作用、通常謂ふ所の欲念なり。
- 二 勝解 明瞭なる理解力 (Understanding) を指す。
- 三 念 過去に於ける事象を記して忘れざる作用即ち記憶力 (Memo-

IV)の如きもの。

四 三摩地 心象を一所に集注する作用。

五 慧 一切萬象を了別するの作用にして思考力 (Thinking) 並に思想 (Thought) をも此の中に含ましむべし。

不定とは其の所屬の定らざるものにして、之れに四あり。

一 睡眠 二 惡作 (所作の業を惡みて追悔する心所) 三 尋

四 伺 (尋は尋求、伺は伺察。淺く分別するを尋といひ、深く分別するを伺といふ)

さて、吾等が觀察せんとする善惡二様の心象を見んに、善惡兩軍の陣容を窺ひ得べし。

善惡の心所

善心とのみ相應じて起るものを善の心所とす。之れに十一あり。

- 信 勤 慚 愧 無貪 無瞋 無痴 輕安 不放逸
- 行捨 不害

皆讀んで字の如し。行捨といふは心を平等正直ならしむる心所をいふ。

さて又惡の方はといふに、これに煩惱即ち本惑と隨煩惱即ち隨惑とあり。

本惑は六。

- 貪 瞋 慢 無明 疑 不正見

而して之れに隨ふもの二十。曰く、

- 忿 恨 惱 覆 (罪惡を覆ふ心) 誑 諂 憍 害
- 嫉 慳 無慚 無愧 不信 懈怠 放逸 昏沈 (暗
- く沈む心) 掉舉 (動き騒ぐ心) 失念 不正知 散亂

善の心所十一、本惑隨惑併せて二十六、衆寡既に敵せざるを見る。

内亂か外寇か

心の戦ひは善に對する惡の襲撃か、道心に對する人心の叛亂か、善惡は相互に對等の權威を有し、内の善心に對して外の惡心の攻め來れるか、抑も又内の惡心に對して外の善心の侵し入れるか、道心治下にある人心の叛逆を企てたるか、人心治下に於ける道心の内亂を計りたるか、此の問題を解決するには、人の本性に就て仔細の考究を遂げざるべからず。性を善とすれば此の中に起れる惡は叛軍とすべく、性を惡とすれば善は外より來る敵軍たり。敵か味方か、是れ重要問題たり。

性善性惡

蓋し性善性惡の問題は古來の疑團にして、孟子夙に性善の説を立て、良

智良能の義を述べて、

人の學ばざる所にして能くするものは良能なり。慮らずして知るものは良智なり。孩提の童子も其の親を愛するを知らざるなく、長じて其の兄を敬するを知らざるなし。

といひ、人皆惻隱の心あるをいひては、

人皆忍びざるの心あり。今人、孺子の井に入らんとするを見れば、皆怵惕惻隱の心あり。交を孺子の父母に内るゝ所以にあらず、譽を郷黨朋友に要する所以にあらず、其の聲を惡みて然らざるにあらず、是に由りて之れを見れば惻隱の心なきものは人にあらざるなり。

と。これを仁の端とし、羞惡の心を義の端、辭讓の心を禮の端、是非の心を智の端とし、

凡そ我れに四端あるに皆擴して之れを充つるを知る、火の始めて燃え

泉の始めて達するが如し。

と。又本能的に之れを示して、

心の同じく嗜む所のものは何ぞや。理と義とを謂ふなり。故に義理の我が心を悦ばすこと猶ほ美味の口を悦ばすが如し。

と説く。此の性善説に對して荀子の性惡説あり、曰く、

人の性は惡、其の善なるものは偽なり。今、人の性、生れて好利あり、是に順ふが故に爭奪生じて辭讓亡ぶ。生れて疾惡あり、是に順ふが故に殘賊生じて忠信亡ぶ。生れて耳目の欲あり、聲色を好むあり、是に順ふが故に淫亂生じて禮義文理亡ぶ。然らば則ち人の性に順ひ、人の情に順はゞ必らず爭奪を生じ、亂理して暴に歸せん。故に必らず、將に師法の化、禮義の道ありて、然る後に辭讓に出て、文理に合して治に歸す。之れによりて之れを見れば人の性の惡たるや明かなり。

と。孟子は説を性善に立て、本性の開發を示し、荀子は論を性惡に立て、矯正の要をいふ。

人生れて欲あり、欲して得ざれば則ち求めなきこと能はず。求めて度量分界なければ則ち争はざること能はず、争へば則ち亂る。亂るれば則ち窮す。先王、其の亂を惡むが故に禮義を別して之れを分つ。

と説きて禮の必要をいふ。其の志す所一なりと雖も、立論の根柢を異にす。孟子の説に従へば、惡の跳梁は本性に對する叛逆となり、荀子の説に従へば、善の襲撃は外よりの侵略となる。董仲舒出づるに及びて善惡混淆の説を立て、

禾は米を出すと雖も、禾未だ米といふべからず。性は善を出すと雖も、性未だ善といふべからず。繭に糸ありと雖も、繭は絲にあらず、卵に雛ありと雖も、卵は雛にあらざるが如く、性は善にはあらざるなり。

卵なり、繭なり。卵は復るを待つて後に能く雛となり、繭は練るを待つて後に能く糸となる。性は教誨を待つて後、能く善なり。といひ、「天に陰陽の禁あり、身に貪(悪)仁(善)の権あり」と説く。楊雄は天、生民を生ず、倥侗顛蒙にして性善惡混ず、其の善を修すれば善人たり、其の惡を修すれば惡人たり。

と。これ人心を交戰地帯とし善惡兩軍之れに入つて戦ひ、人は其の勝つものに従ふとす。韓退之は性と情とを分ち、性は生と俱に生ずる先天的のものとし、仁、禮、信、義、智の五を算し、情は物に接して生ずる後天的のものとし、喜、怒、哀、樂、愛、惡、欲の七を算し、其の性に三品あり、上なるものは善のみ。中なるものは導きて上下せしむべく、下なるものは惡のみ。

といふ。情は七情其の中庸に處るを上とし、中庸に合せんことを求むるを

中とし、直情にして行ふものを下とす。其の門に李翱あり。截然と性と情とを區別し、

人の以て聖たる所以のものは性なり、人の以て性を惑はすものは情なり。

といふ。これ性を善とし、情を惡とするもの、而して此の性と情との關係に就ては王安石に至つて其の本の一なるを説かる。曰く、

七情の未だ外に發せずして心に存するは性なり。七情の外に發したるは情なり。性は情の本、情は性の用なり。

と。性と情との争ひに本末の戦ひのみ。かくて宋儒に至つて理氣の説出て、程子は「性に不善なし、而して不善あるものは才なり」とし、

性は天に出て、才は氣に出づ。氣清ければ則ち才清く、氣濁れば則ち才濁る。才には則ち不善あり。性には則ち不善なし。

とし、性は絶対平等にして萬人に通じ、氣は個々差別にして萬人同じからず。此に於て朱子は、天地の性と氣質の性とを分ち、

天地の性は則ち太極本然の妙、萬珠の一本なり。氣質の性は則ち二氣（陰陽）交運して生ず、一本にして萬珠なるものなり。

といひ、心と性と情と欲とを分ちて、

心は水の如く、性は猶ほ水の静なるが如く、情は則ち水の流にして、欲は則ち水の波瀾の如し。

と。此に於て知る心内の軋轢葛藤、皆これ一身上の波瀾。其の人心と道心とを説ける言にいふ。

道心は是れ義理上發出し來る底。人心は是れ人身上發出し來る底。聖人と雖も人心なき能はず、飢ゑて食ひ、渴して飲むの類の如し。小人と雖も道心なき能はず、惻隱の心の如き之れなり。

と。道心と人心との戦ひ、これ外寇にあらず、果然心内の争鬪、這般の問題に就いて最も精細を盡くせる佛教を瞥見するを要す。

本來清淨

道心人心共に自己を離れず。然らば何れか主にして、何れか従、何れか本にして、何れか末なる。唯識に阿頼耶識を説いて心王中の主宰者とし、能く一切の種子を含藏すといふ。善惡之れより出るも、亦之れ眞に主宰者にあらず。彼れを以て一家の主人に喩へ、一城の主に比すべきも、一國の主権者にはあらず。心の王國を支配せるもの、識に於て之れを庵摩羅（即ち清淨識）といひ、理に於て眞如といひ、性に於て佛性といひ、又本然自淨心を説く。萬有を總該し、宇宙に遍滿せるもの、吾等は此の宇宙精神と脈絡貫通せるものを有す。朱子の所謂天地の性なるも亦之により迷り出

てたるのみ。此の心絶對、此の心靈妙、此の心清淨、唯だ差別の妄執長へに之れを覆ひ、迷惑の雲固く鎖して、奥底深く沈みて其の影を示さざるのみ。其の之れを覆蓋するものを總稱して煩惱といふ。これ心の敵なり。

○ 心自ら心を證し、心自ら心を覺す。之れを菩提を成すと名く。他によりて證し、他によりて覺するにあらず。(大日經疏)

○ 聞くまゝにまた心なき身にしあれば

おのれなりけり軒の玉水

(道元禪師)

心の敵

敵軍の將

心の敵は我執を主將とし、貪、瞋、痴、慢、疑を參謀とす。貪とは自我を中心として一切五官の快樂を追ひ求むる心にして、瞋とは一切自己に快からざるものに對して敵意を有する心。痴とは理智の判斷を請はずして心を不明曖昧の狀に導き、慢は自ら恃み仁を輕んじ、非義非分の希望に動き、疑は猶豫して決せず、躊躇逡巡して漫りに他を疑ふ。これ皆本性を覆蓋する叛軍の將たり。而して之れと相表裏して叛軍を援助する五欲なるものあり。

叛軍の援助

煩惱を増長せしむる五欲は之れを内外の二に分つ。外の五欲は眼耳鼻舌身の五官によつて感受する色、聲、香、味、觸にして、『四教儀』は之れを解して云ふ。

一 色欲

男女の形貌端正なるもの及び世間の寶物玄黄朱紫種々の妙色、能く衆生をして樂著し厭くことなからしむ。

二 聲欲

絲竹環珮の聲及び男女の歌咏等の聲、能く衆生をして樂著して厭くことなからしむ。

三 香欲

男女の身香及び一切の諸香能く衆生をして樂著して厭くことなからしむ。

四 味欲

種々の飲食肴膳等の美味、能く衆生をして樂著して厭くことなからしむ。

となからしむ。

五 觸欲

男女身分柔輒細滑、寒き時は體温かに、熱する時は體涼しく、及び衣服等種々の好觸、能く衆生をして樂著して厭くことなからしむ。

五官の感受する所、皆我が愛著を起さざるなし。何人か美を好み、醜を厭はざらむ。美を美とし、醜を醜とする、もと深く我が心性を汚さずと雖も、美なれば愛著し、醜なれば之れを厭ふ。好惡の情、之れより動いて貪瞋の念益々強く、愚痴の迷雲、終に眞如の光を味ますに至る。五官は之れ經驗の本、智識の母にして心の明を増す所以なりと雖も、一たび執著の情加はつては、急轉直下の勢ひを以て惡に趨向す。管絃に家を破り、酒色に身を亡ぼす、皆此の類。彼の坊間に傳へられたる鑄掛屋松五郎の逸話の如きは、好個の例とすべきもの。彼れは正直なる職人なりき。日々額に汗して

營々として怠る所なかりき。しかも兩國橋下、「吹けよ川風、上れよ垂簾」と節面白く、大盡遊びを試みるものを見て、あれも一生、これも一生、太く短く渡るを以て快樂を貪り得べしとし、商賣道具を投げ込みて、一轉して盜兒の群に入りぬ。彼れの心機を轉せしめし所以のものは、浮世の歡樂に耽る大盡遊びなりき。内の五欲も亦本能的に吾等の享受せるものにして、彼の外より内に入るに對し、此は内より外に出てんとするもの、其の中を得れば則ち誤なきも、一たび程度を越ゆれば心性を攪亂する、之れより甚しきはなし。財、色、食、名、眠の如き之れなり。

所有欲

財は即ち世間一切の資財、人は之れによつて己を養ふ。故に人には所有の本能有り。他の物を得て自己の用に供せんとす。否、其の用に供すると

否とを問はず、自己の勢力範圍に置かんとするの傾向あり。これ一種の自己擴張。人は之れあるが故に發展すべしと雖も、亦之れあるが故に迷ふ。彼の婦女子が呉服店頭に飾られたるものを見て、之れを得んとするは心の本能なり。彼れ必ずしも其品の必要缺くべからざるにあらず、漸く得ては之れを十襲して箆筒に收め、時に出して以て「我が物なり」と破顔微笑するの快を食らんとするなり。有るが上に有るを願ふ人心。彼の守錢奴の「我は唯だ我が財の増すを望むものなり」とて恥を忍び、人情を缺き、義理を顧みざる破廉恥の所行を敢てする、もと此の心より發す。此の貪欲の裏には愛惜あり、ほしいとをしいは相隣り、自己の所有を擴張せんとする欲は必らず自己の所有より分離せしめざらんとする欲と伴ふ。故に人の他に與へんとするや、多く他の慾望の之れを制するに出づ。

名譽欲

人には他に優越せんとする本能あり。財を積んで人に誇らんとするも其の一なり。財を惜まざるを以て他に賞せられんとするも亦其の一なり。名利は人生の繫縛、利の爲にせしむるものも亦名の爲にす。名も亦一種の自己擴張。譽められて喜ばぬものなく、毀られて腹立たぬものはなし。毀譽に心の動く所以は此の名譽欲あるに由る。名必ずしも不可ならず、人は此の爲に發奮することあるも、常軌を逸しては憫笑すべきもの少からず。爛てに乗つては自己を忘れ、虚榮に驅られては利害を没す。昔時プラトインの盛宴を張りて精神を饜應するや、乞食哲學者デオゲテス招かざるに來りて泥履を以て其の絨氈を踏み蹂りて「敢てプラトインの高慢心を踏む」といふ。プラトイン平然としていふ、「汝の破れ履の穴より汝の高慢心のほの

見ゆるにあらざや」と。此の事實の眞偽は明かならざるも、此の話題は直に人の名譽心を見るべきものにあらずや。富貴を誇るも名譽心ならば、清貧を誇るも亦一種の名譽心なり。人は畢竟名譽の奴隸なる哉。

色欲

種の繼續は人類の本能にして、其の爲に現れたる生殖欲は、一定の年齢に對しては異性相慕ひ、男は兎角女に善く見られんを望み、女は又殊に男に善く見られんと欲す。其の爲に脂粉に心を勞し化粧に浮き身をやつす。愚なるが如しと雖も、人生の常狀。車夫の賃錢に一錢二錢を値切りながら藝妓の纏頭に數十金を惜まざる、これ此の欲の發現にあらずや。異性相引き、同性相離る。女の前て他の女を譽めては、これを賛成する前に、必ず其の缺點を剔羅せずば氣が濟まぬものと見えて、男が、

「オイあの女は別嬪だネー。」

といへば、女は、

「別嬪は別嬪ですけれども、少し鼻が高過ぎます。」

などと缺點を指摘して心を安んずるも、亦此の理に外ならず。

食欲と眠欲

食は以て口を糊し、命を繋げば足るべきなれど、美味を食つては飽くことなきは人情の常。酒に溺れて産を破り、食に釣られて命を失ふ。冷静に思考すれば、此の如きことの生ずべきの理なきも、往々にして其の實例を目撃するは、以て人心の没理的方面を暴露するものにあらずや。眠は休養の要素、こゝにいふはたゞ睡眠のみならず、人に骨惜みの欲あるをいふ。難を避けて易に就き、勞を厭いて逸を好む。僅に手を伸べて取り得べき器

具をも、わざ／＼臺所より下女を呼びて之れを取らしむ。これ一舉手の勞を厭ふが故にして、數歩の地にも腕車を雇ふは一投足の逸を求むる所以。吾等の心はこれら慾望相互の競争によつて紛糾更に一層を加ふ。

百八煩惱

吾等の本心を覆蓋し、心海を攪亂する叛軍の數、限りなし、暫く數に約して百八の煩惱といふ。『天台四教儀集註』にいふ。

昏煩の法、心神を惱亂する故に煩惱と名く、謂く眼耳鼻舌身意の六根色聲香味觸法の六塵に對して各好惡平の三種の不同あり、即ち十八煩惱となる。又六根六塵に對して好惡平の三種に苦受、樂受、不苦不樂受を起す、復た十八煩惱となる。共に三十六種となり、更に過去、未來、現在の三種に約して各三十六種あり、總て百八煩惱となる。

と。これたゞ其の感覺より入り来るもの。更に内より起るものを算しては終に八万四千の塵勞をいふに至る。しかも之れ大数のみ。更に算せば無量に達す。叛軍の跳梁終に底止する所を知らずといふべし。

心敵如何にして起る

本心もと平穩、何が故に此の動亂を生ずる。曰く差別の妄執之れに加はり、人欲の私其の明を味まさんとするが故なり。「大乘起信論」はいふ、「心性は常に念なし、故に名けて不變と爲す、一法界に達せざるを以ての故に心相應せず、忽然として念起るを無明と爲す」と。心性は、もと眞如に出て、清淨にして不變なり。唯だ此の眞如法界平等の一理に通達せざるが故に如是の相を如是に観ずる能はず、是の如きの天地人生を是の如くに觀ぜざるが故に、忽然として差別の妄念を生じ、自他もと平等なるべき上に自

らを重んじ、他を輕んずるの思想を生じ、自己を中心として一切を處斷す。これ實に無明煩惱の源泉。自他の差別は好惡の心となり、好惡の心は愛憎の念となり、愛憎の念は貪瞋の執となり、迷りては自讚毀他の情に驅られ流れては痴慢の海に入る。此の一念僅に動きたる所を無明業相といひ、之れによりて主觀客觀の別を生ず。主は自、客は他、自を能見の相又轉相といひ、他を境界の相又現相といふ。此の業、轉、現の三相其の働き微細にして知り難し、之れを三細と名く。此の働きによつて外界を分別する智相を生じ、もと平等なるべきものを區別して愛憎好惡を生じ、此の心一層堅くなりて愛好には樂を感じ、憎惡には苦を感じ、此の差別を持続するを相續心といひ、其の苦樂に執著して心に離す能はざるに至るを執取相といひ、終に實なきに名を執じ、名によつて迷ふ、これを計名字相といふ。これによつて決意して身口意を動して行爲に現するに至るを起業相といふ。

此の業即ち行爲によつて其の結果を受くるを業繋苦相といふ。本心一たび動いて三細となり、三細より智相、相續、執取、計名字を出し、これによつて決意し行動し、終に其の結果を受く。吾等は實に此の如き心的過程を経て惡に惡を重ね、罪に罪を重ねるに至れるなり。もとこれ差別一點の黒雲、性天を覆ひて、大雨、車軸を流し、迅雷、屋宇を震ふに至らしむ。

心の主

兩軍の陣容

自我の一念、心境の平和を破り、廣く徒黨を集めて掠奪を逞しうす。心王、奈何か之れを黙過せん。討伐の義軍は起らざるべからず。彼れに八萬四千の塵勞あれば、我れに入萬四千の法門あり。彼れに貪瞋痴の三毒あれば、我れに智仁勇の三徳あり。彼れ我執を標榜すれば、我れは無我を旗幟とす。彼に若し貪瞋痴慢疑をいへば、我れは仁義禮智信を説く。人心之れに靡けば、道心之れを防ぐ。慳貪の要塞は之れを抜くに慈悲の軍を以てし、瞋意の城は之れを攻むるに忍辱の師を以てす。愚痴の鐵條網は智慧の劍を以て之れを斷ず。亂心の水雷艇は靜慮の砲を以て驅逐す。無明の暗夜には眞

如の探照燈あり。煩惱の伏兵には先づ佛性の斥候を走らす。陣容整うて、兵火既に開かれ、兩々相下らずして干戈相交る。是れ吾等が心内の苦戦にあらずや。勝敗の決、此の一擧にあり。道心勝つか、人心勝つか、吾等の運命は、實に此の戦鬪に定めらる。

初 一 念

戦鬪は苦痛なり。吾等が心内に於ける此の争ひも其の繼續する間は常に苦慮を離れざれど、勝敗孰れにか決して却て心安く、偶々敗軍の機に乗じて捲土重來することあるも、決意堅ければ之れを卻くるに造作なく、終に其の事の習慣となるに至つては、曾ては苦慮して決したることの容易に決せらるゝに至る。一善の微、一惡の小も、始めは此の戦鬪を経由し來り、終に慣ひ性となつて、一生の禍福を分岐す。此の勝敗は實に畢生の性格を

築成するの基礎。善に向ふか、惡に走るか、門前一步の差、萬里の懸隔を生ず。慎重に考慮すべきは、此の一念にあり。

習 慣 の 力

世にも恐るべきは習慣の力なり。其の始めに於て躊躇したることも、慣れては何の逡巡する所もなく、其の始めに苦心したることも、慣れては心易く、二度あることは三度四度。惡に向うては治し難き常習犯となり、善に向うては慣ひ高潔の性となる。試に吾等が歩行に見よ。其の始めは這ふことを知つて立つことを知らず、漸く立ちては倒れ、戸障子を力として一步二歩又三步、僅に歩み得たるものにして、其の當時は確に歩むことよりも這ふことを容易なりとしたりしなり。されど其の歩むことの習慣となりては、吾等は這ふことの却て苦痛なるを感ずるにあらずや。習慣は第二の

天性にして其の力天性に倍す。吾等が性格を善美ならしむると、醜惡ならしむるとは、一に此の習慣に由り、其の習慣の始めは心内の戦争に於て、善勝つか、惡勝つか、此の勝敗の決に出發し來るなり。

吾等の心

悲哉。吾等が心は宿習の然らしむる所か。常に妄念の跳梁に委ねられ、人心跋扈して道心の出路を遮り、惡心時を得て善心影を潛め、氣質の性は勢ひに乗じて、本然の性、姿を晦まし、理智は情執の囚虜となり、慈仁は慳貪の獄に繋かれ、三徳其の明を失し、三毒其の暗を擅にし、黑暗々たる心裡、惡に走りて惡たるを知らず、罪に墜ちて罪たるを忘れ、五欲競ひ起り、六塵争ひ立ちて、迷惑困頓、認めて以て人性の常態と爲す。嗚呼、吾等は、一敗地に塗れて復た起つ能はざるか。何ぞ必ずしも然らん。機を

見て起つべく、隙に乗じて伐つべし。

罪惡の自覺

中宵人なく、四隣寂たるの時、靜に吾自ら我が心を見よ。果して自ら疚しきことなきか。果して自ら過てりと覺ることなきか。抑も亦恥しと感ずることなきか。疚しと見、過てりと覺り、恥しと感ずる、これ心の奥深く潛める一點の靈火の闇を破りて輝き出せるなり。これ此の反省、これ此の靈覺、之れ實に惡念討伐の機、道心突入の隙たり。鏡の曇れりと知るは、其の明かなるを以て性とすが故にあらずや。吾等の心は鏡の曇れるが如し、曇れりと知らざるが故に萬象の歴々として影を映さざるを怪みさ。今既に曇れりと知る、これやがて其の塵を拂ひ、穢を拭うて明かならしむるの第一手段。討伐の義軍は此に起らざるを得ず。蓋し罪惡の自覺は靈性發

揮の發足點にして、吾等は先づ之れによりて復び太平を性心地に致さざるを得ず。

自ら救ふの道

吾、我を見る。見る所の我は現在刹那の我にして、見らるゝ所の我は過去永遠の我なり。見る所の我は心裏の秘奥より出て、見らるゝ所の我は境に應じて活動し來りし我なり。此の我を以て彼の我を見る。誰か悔恨の情なからん。悔恨は向上の要路。自ら救ふの道、此の外に求むべからず。たゞ此の現在刹那の閃きを捕へて、過去永遠の我を棄つるの努力足らざるが故に、心靈の閃き、忽ちに消えて、我は復た常闇の昔に還り、偶々内省し得たる所のものをも實行する能はずして、思ひながらに墮落し、覺りながらに惑亂す。決心は力なり。知りて行はざるは力足らず、意弱きなり。力足らざ

るものは敗れ、意弱きものは倒る。魔軍此に於てか跳梁し、折角の自覺も其の功なきに終らむ。思へ、現在刹那の此の閃きは、將來永遠の我を改造するなり。皮相の我を棄て、眞の我を出さしむるなり。鏽を去りて光を増し、曇を除いて明を加へしめんとするなり。機は熟して義軍既に起ち、隙あつて道心乗す。我之れに應じて奮起せば性格の向上何の難きかあらむ。此の閃きを感じたるは之れ發心なり。之れを放たじと執ふるは決心なり。此の決心にして撓むなく、一日又二日、行うて倦まずんば慣は性となつて言々道に協ひ、句々靈性に從ひ、舉手悉く本心の誠に出て、投足皆眞我の令に悖らず。

水鳥の行くもかへるもあとたえて

されども道は忘れざりけり

鳥の空中にあつて空を相忘れ、魚の水中にあつて水を相忘るゝが如く、大

道の中に遵據して大道を相忘れ、孔子の所謂心の欲する所に従うて距を踰えざるの妙境に臻達するを得むか。修養の工夫は此の過程に於て深く心を留むべきを要す。

己に克つ

人若し修養の工夫を問はゞ、吾等は一言にして答ふるを得べし。曰く心内の叛亂を鎮定し、善念をして勝を制せしめ、道心をして凱歌を擧げしむるにあり。まこと心中の賊は山中の賊よりも破り難く、二六時中、我を侵し我を掠む。若し夫れ之れを服し之れを伐つを得ば、先きに我を苦むるも亦來つて我が用を爲す。呂與叔の「克己の銘」に云ふ。

且つ戦ひ、且つ徠る、私に勝ち慾を窒ぐ、昔は寇讐たり、今は臣僕、其の未だ克たざるに方りて、吾が室廬を窺ひ、婦姑勃醜せば、安ぞ厭

の餘を取らん。亦己に之れに克たば皇々として四達し、洞然たる入鹿皆我が闕に在り、孰か天下吾が仁に歸せずと云はむ。

と。曾て我が室廬を苦めしもの、今は我が闕にあり。小我を執するの食は之れ我が賊なりと雖も、天地を以て我が家とし、三界を以て我が有とするは之れ聖賢の大觀。我執に起るの瞋恚に我が明を味ますも、天下の爲に怒り、衆生が爲に憤る、之れ志士仁人の芳躅にあらずや。不斷煩惱得涅槃、煩惱の醜も大覺に使はれては却て涅槃の料となる。「澁柿の澁そのまゝの甘さ哉」澁柿は之れ煩惱の結集。採つて食ふべからざるも、靈性の感化宜しきを得、智慧の日の光に晒せば澁も亦甘味を添ふ。煩惱を捕虜とし、妄執を家奴とせよ。洪自誠いふ、

耳目見聞は外賊たり、情欲意識は内賊たり、只だこれ主人翁渥々不味にして中堂に獨坐せば、賊便ち化して家人と爲る。

と。惺々不昧の主人翁これ我が心裏の主にして、宇宙の靈性と脈絡貫通せるもの。彼の中江藤樹が人に與へて「日々心の奥の良知の主人公に御對面これあり候へば然るべし」といへるもの、亦之れに外ならず、賊をして家人たらしむ、修養此に至つて聖賢と相通ず。

賊を家人と爲す

近世の碩徳、七里恆順、博多萬行寺を董す。一夜更闌けて獨り佛前に經を誦するの時、一個の兇漢、手に白刃を携へて、和尚の後に立ち、「金を出せ。」

と逼る。和尚少しも氣附かず、朗々として經を誦す。賊迫ること再三なるも、和尚之れを顧みず、賊亦已むを得ずして其の終るを待つ。這般の光景何等の好對照ぞ。眉雪の老僧、經を讀むの處、後へに兇漢の劔を持つて立

つあり。やがて經終りて初めて賊を顧み、徐ろに

「何の用ぢや。」

賊、激して云ふ、

「金を出せ。」

和尚平然として、

「ハ、ア金が欲しいか……金なれば次の間の小箆筒の二番目の抽出にある。」

賊即ち次の間に至り、金を出し來る。額數百金。

「寺にはそれだけしかない、持つて行け。」

「へい。」

「不足かね。」

「何ういたしまして。」

賊、呆然として立つ。和尚、

「早く行け……人が来ると面倒ぢや。」

賊、倉皇として去らんとす。和尚、

「待て、待て……人に物を貰ふた時は禮をいふものぢや。」

恰も幼児に訓誨するが如し。賊、漸く、

「有難う。」

の一語を遺し去る。数日の後、官、其の賊を捕へて一々罪状を訊す。賊乃ち前日萬行寺に忍び入りしことを自白す。官、和尚を呼びて告ぐるに其の事を以てす。和尚は之を否定して、

「盗られたことはない。——遣つたのである。」

「イヤ白刃を翳して貰ひに行つたのだから脅迫いたしたのであらう。」

「以ての外のことを仰せらる、恆順、老いたりと雖も、白刃に恐れて金を

出し申さぬ……彼の者が呉れよと申すから遣したのでござる。」

此の和尚の慈悲深き一言に、さすがの兇賊も心に恥ぢて、

「左様仰せらるゝは有難けれど、全く盜賊に忍び込んだのに相違ござりませぬ。」

といふと、和尚は、

「何處の國に金を盗んで禮をいふて行くものがあるか、おまへは彼の時禮をいふて出たてはならぬか。」

感激の極、賊は涙を流して、其の罪を謝し、警官も亦其の徳を偉なりとしたれど、尚ほ餘罪のありしが故に刑を受け、刑期満ちて直に和尚の許に赴き、懺悔して僧たらんことを請ひしも、和尚は

「おまへのやうな宿業の深いものは、なか／＼坊主にはなれぬ。まあ納の寺の會計でも手傳つて居れ。」

と。かくて此の賊、一錢の私なく、和尚に事へしといふ逸事の傳へらるゝあり。吾等若し心内の賊をも此の如くならしむることを得ば、即ち干戈を動かさず太平を致すを得ん。吾等は此の一場の美譚によつて吾等が靈性の閃きは内より來るもののみならず、又他の教化によつて開發せらるゝものあるを認めざるを得ず。

外縁の力

紀州の「南龍公言行録」には、熊野の奥に父を殺して其の惡たるを知らざるものありしを、公のいたく歎かれて、如何に邊鄙の地なりとも、かゝる大罪を犯して其の罪たるを知らぬものあるこそ悲しけれとて、其者を藩の儒者に托し、人倫の道を説き聽かさしめられしに、初めは物の道理をも解せざりしが、終には自ら其の罪の大なるを知りて、進んで所刑を望むに

至りしを傳ふ。これは極端の一例なれど、人の心の外縁によつて啓發せらるるの一例とすべきか。曾て聞く、伊藤仁齋、夜行きて途に賊に遇ふ。仁齋賊の需むるに従つて毫も吝も吝の心なし。賊、怪みていふ、我れ年來賊を業とし未だ足下の如く鄙吝の心なきものを見ず、足下何によつて其の然るを得るか。仁齋いふ、我れは聖人の道を學ぶものなりと。賊問ふ、如何なるかこれ聖人の道と。仁齋諄々として仁義を説く。賊豁然として悟る所あり。我未だ世此の如きの道あるを知らず、徒らに邪道に落ちて半生を空過す、願くは足下の門に入つて道を聽くことを得んかと。奪ふ所の物を還して終に之れに師事したりと。教なければ禽獸に近し。吾等は此の教化が心靈啓發に偉大の力あるを忘るべからず。

外縁と内縁

外界の事象は悉く我を昏惑するもののみならず。飛花落葉、我を啓發し、桃花擊竹、我を教訓す。況や聖賢の言行、偉人の感化、或は文字の上に見れ、或は自ら見聞するに於てをや。我は之れによつて警められ、之れによつて教へらる。先の静思冥想して、吾、我を見て初めて其の閃きに接するものを内縁といひ、今の外より來つて我を啓發するものを外縁といふ。若し夫れ外縁によつて内に省み、内縁によつて範を外に求め、内外相應じて心性を鍛鍊せば、一個の頑鐵も亦終に明皎の利劍とならん。道は宇宙に遍満して又個々の人心の秘奥に潛む。時に外縁によつて動き、又時に内縁によつて動く。内縁動くも、執持堅からざれば外界の事情によつて墮落し、外縁來るも内に妄執盛なれば、終に入る能はず。内外相映發して一切を淨化す。これ吾等が修養の要義なり。

道念の培養

強きものは勝ち、弱きものは敗る。吾等の道念をして熾烈ならしめよ。人欲の私、何ぞ又我を味まさん。外縁を以て培ひ、内省を以て養ひ、終始其の力を大ならしめば、心魔も窺ふべきの隙なく、妄想も乗ずべきの機なく、所謂干戈を動かさずして太平致すの理想境を現出せん。強くあれ、大なれ。釋迦何人ぞ、孔子何人ぞ。英雄豪傑、偉人傑士、我れと何の異なる所かあらん。此の氣宇以て心内の敵を降服せしむべし。心の戦ひも畢竟優勝劣敗の通則を離れず。

眞我の顯現

心の戦争は一舉敵の本營を衝き、其の主將を虜にせざるべからず。本營

は人我の山にあり、我執を以て將とす。我執纒に起れば貪となり、瞋となり、痴となり、百八の煩惱此に萌し、八萬四千の塵勞此に蜂起す。苟くも我執なからんか、一切平等所謂天地を家とするの氣宇を生じ、八紘悉く我が仁に歸す。これ我が個性の小我を棄て、普遍の大我に合し、皮相の假我を去つて内實の眞我を發揮する所以。我執の打破は自己を滅却するにあらずして、自我を大ならしめ、強ならしむるなり。中印度の一皇子は之れによつて三界の大導師となり、猶太の大工の子は之れによつて世界の救主となり、魯の小吏は之れによつて億兆の師父と仰がる。小我なき所に大我出て、個性我なき所に普遍我現れ、假我なき所に眞我動く。

大なる我

我の大小は以て人物評價の標準とすべし。區々個性我に囚はれて、自己

以外一步も出づる能はざるものは最も其の低きものなり。自己を愛するが如く父母兄弟を愛し、自己を思ふが如く其の妻を思ふ。これ其の稍高きものなり。されど彼等は家族我の範圍に局限し、血族我以外に出づる能はず。妻は病床に臥し、兒は餓に泣く。しかも蹶然袂を拂つて君國の難に赴く、國家我の更に高きに及ばず。現代の社會は國家を至上とす。愛國の思想は此の國家我の發動。忠臣義士の行爲の崇高なる所以實に此にあり。されど國家の爲に國家を愛するは未だ至高なるものにあらず。我が國家を愛する所以は之れによつて世界人類の福祉に貢獻せんとするにありて、高き思想の加はるに及びて、其の國家我の發揮は更に力強きものあり、世界我に立脚して國家を思ひ、人類我に出發して愛國の舉に出づ。至仁至高の人格ここに出て、進んで宇宙一切に遍きに及びて吾等は之れを神とし佛として其の靈格に隨喜す。

超越せよ

超越せよ、吾等は超人の思想を歓迎す。擴張せよ、吾等は自己擴張の主義に隨喜す。然れども、それは僅に吾等と比肩し得べき群小と一寸二寸の超越を争ふにあらずして、群小を下瞰するの白眼を養へよといふなり。漸く自己の見聞し得る範圍に擴張を試みて他を侵害するものをいふにあらず、自己を擴めて宇宙大ならしめよといふなり。否、吾等は實に宇宙の一員として一舉一動、全宇宙に影響すべきの地位にあるなり。眞に此の地位を自覺する時、吾はこれ宇宙大に擴充せらるゝにあらずや。神性こゝに發露し佛性こゝに顯現す。

宇宙と我

五尺の短身、小なりと雖も、宇宙の一部分これを缺いては宇宙其の完全をいふ能はず。五十年の生命、短なりと雖も、之を除いては天地其の悠久を誇る能はず。五尺の短身、直に宇宙の完否に影響し、五十年の生命、直に天地の悠久に繋がる。之れを自得するの時、吾等は自己の大なるを知ると共に、亦肅然として自重の念なきを得じ。大なれ、さらば汝は強なるを得じ。見聞覺知によつて其の心を動かすものは、最も弱きものなり。人を相手として心を動かすものも亦其の弱きものなり。人を相手とせずして天を相手とし、世を擧げて非とするとも悲まず、世を擧げて可とするも喜ばず。吾、我が眞我を頼む、これ其の大にして強なるものなり。

信は力なり

心の強きものは自ら能く心敵を蕩盡すべきも、心の弱きものは常に其の

力の足らざるを煩悶し懊惱して自ら意氣地なきを嘲たざるを得ざるか。否、内縁の力強き者は自力を以て征服の業を遂ぐべきも、力弱きものには外縁の之れを助くるあり。翻々として風に動く一片の紙も、大盤石に貼りつけては動かざるが如く、動き易き心をも信仰の力は能く之れを堅固なる基礎の上に立たしむ。信は力なり、我れ痛切に我が弱きを感じ、偉大なる靈格に信頼する時、其の加被力は我をして解脱の境に至らしむ。一文不智の尼入道も、之れによつて丈夫も及ばざるの決心を示し、匹夫も亦其の志を奪ふべからざるの強烈を示す。

飛び込んだ方

我をひれ伏さしむるものは我を起たしむる所以なり。渾身の至誠を以て神に縋り、滿幅の熱情を以て佛に頼る。神の恩寵は其の身を包み、佛の慈

光は其の胸に溢れ、我執全く没し、妄念其の影を隠す。此の如くにして彼れは小我の拘束より解脱して大我の靈域に入り、彼の弱きものは此に強き力を加へられ、佛神以外、又我れを累するものなしとの信念は、驀直に自己の決意を實行して顧慮するなきに至る。「飛び込んだ力で浮ぶ蛙かな」一句此の消息を洩らす。

守る所

人と神とを結合し、衆生と佛陀とを感應せしむる宗教、これ豈に弱きものみの力ならんや。自ら強しとする心も動き、猛しとする氣も緩む。人は實に弱きものなり。此に於て精神生活に中樞を得んとする宗教的要求は、終に心裏の靈火と相映發する佛神を描き出して之れに依頼せんとす。而もこれ架空の影像にはあらず、宇宙に遍満し天地に瀾淪せる絶對の榮光。冷

かに見れば宇宙は全にして、吾等は分。此の一分直に宇宙の全體に關係す。情感の眼を以て見れば吾等は實に此の宇宙の懷に抱かれ、天地の手に育まるとなり。悶えたりとて、騒ぎたりとて、吾等は之れを離るゝ能はず。離れんとするは小我に誘惑せられたる妄執なり。ヒタと身も心も之れに投げ入れて、彼の赤子が慈母の懷に依り添ふが如くならば、苦慮なく煩悶なく、天地の公道に立ちて天地の事を行ふを得むか。

人情

浮雲變態

我が心解き難く、何ぞ他の心を解かん。解き難き心と心との結ばれて組み成されたる世の中の人の心ほど解き難きはなし。理を以て推すべからず、情を以て測るべからず。利を以て誘はんとすれば、利より高さものあり。威を以て脅さんとすれば威より強きものあり。これ其の美はしき方面なるも、道を以て導かんとすれば利に走り、義を以て説かんとすれば威に屈す。これ其の醜きもの。或は美、或は醜、浮雲千態、實に秋の空の定めなきが如きは人情の反覆と見つべし。

親は泣き寄り

得意の境には、縁を尋ねて千里も、我れに親しみ、失意の境には、近親も亦路傍の人の如し。親の泣き寄りは浮世の義理に餘儀なくせられたるものにして、他人の食ひ寄りこそ利に集る人の心の醜さを最も脱白に暴露したるものならずや。

得る所は一

得る所は一、投げて與ふれば怫然として色を作し、禮を厚うして授くれば喜んで之を受く。紙に包んだからとて一圓が二圓になるわけでもなく、熨斗水引に飾られたからとて五圓が十圓に通用する筈はなけれど、かくせねば快からぬ人情の秘奥には、利を望むと共に、自己を傷けじとする心の

潜めるを示すにあらずや。

實用と趣味

食を盛れば足るべき實用的の椀にも、彩色を施し模様を畫く。施して何の用あり、描いて何の功か増す。用と功とをいふ勿れ、これ趣味なり。人は唯だ實用にのみ動くに非ず。趣味も亦人生を支配する一半の勢力なり。

感情の差

理は以て萬人に通ずべきも、情は個々其の快不快を異にす。中に人類共通のものを認め得べきも、それは唯だ大體の上のみ、個々の事物に關しては人によつて異り、時によつて異り、所によつて異なる。情は主觀的にして且つ浮動的なるもの、父母を同うする兄弟にも其の嗜好を同うせざるあり。

同一の人にあつても年齢によつて趣味を異にし、境遇によつて快不快を同
うせず。甚しきは天候によつて気分を變じ、事情によつて感情を左右す。
心に喜びあれば萬物悉く喜色を帯び、心に悲みあれば觸目皆憂愁の氣を帶
ぶ。而して悲喜たゞ其の人の心、他の得て窺ひ知る能はざる所に因す。情
の測り難きは、理の推し難さの比にあらず。

蓼食ふ蟲

博品館裡、千様の品、我れの見て以て嫌惡する所のもの、人、喜んで購
ひ去り、世上、萬種の業、我れの厭ふ所のもの、人、好んで之れに就く。
去就、是非を以て判ずべからず、人の嗜好各、同じからざるものあるに因
す。所謂「蓼食ふ蟲も好きふ好き」俚語、我を欺かず。

天氣で變る

陰雨濛々としては癡癡の起り易く、一天晴れ渡りては、氣も爽かなり。
爽かなる時には喜びを以て迎へ、陰鬱なる時には怒りを以て應ず。勝手な
るは人の感情。姑の機嫌も天氣で變れば、子供の氣分も晴雨で異なる。能く
之れを看取して、以て舅姑に事ふべく、以て子弟を教養すべし。

聯想と愛憎

「坊主憎けりや袈裟まで」と、之れ其の人を惡んで其の所有物に及ぶ理由
なき憎惡なり。「返すさへ手や觸れけんと思ふにぞ我が文ながら棄てもや
られず」これ其の人を愛して其の手の觸れたる物に及ぶ理由なき愛著なり。
理由をいふこと勿れ。吾等は此の聯想の力によつて感情を支配せらるゝ多

し。「遺物こそ今はあだなれこれなくば忘るゝこともあるべきに」と啣つは
聯想による愛著の思ひ出にして、彼の豫讓が衣を刺して心床しとせるは憎
悪の聯想なり。

多情多感

人々其の稟賦と境遇と嗜好とを異にす。故に其の聯想の趨る所も亦同じ
からず。甲にあつて深く感ずることも、乙にあつては輕々に看過し、丙に
あつては趣味ありとすることも、丁にあつては殺風景と見る場合少からず。
落葉、窓を打つ聲、多感の詩人は無限の興趣を味ふも敵持つ身は不慮の
害を想ひ、海棠一枝雨を帯ぶ、多情の才子は美人の憂に沈めるに比するも
心なき野人は何の思ひ浮ぶ所もなし。所謂多情多感は此の聯想の尤も鋭敏
に且つ繊細に流露するもの、稱のみ。

異中の同

面の如くに異る人心。人情得て測り難しと雖も、異中自から同あり。罵
られて怒り、譽められて喜ぶは萬人の常情。好む所同じからざるも、美を
愛し眞を喜び、善を慕ふ。窮極の心は、異なるにあらず。蘆葉、風に戦ぐ
暮秋の景、心なき身にも悲愁を感ぜざるはなく、柳櫻をこそまぜし春景色、
憂さを花間に忘れざるは少し。「葉末集」に「荆茨の中に鹿は置きたくなく、
鶴は老松の梢にあらせし、目ざましきもの、尊きもの、可愛きもの、美
しきもの、皆其の所を得させたきは我人の情ならんと思ふ」といへるは、
共通の情に着眼せるもの。

花間の涙

同中異あり、花間の涙。

櫻白桃紅次第春。

西陲三月尙兵塵。

誰知裙屐紛如織。

中不花前幾淚人。

萬人花に浮かれ、我れ獨り泣く。同を以て推すべからず、異を以て定むべからず。

色に現はる

隠せど色に現はる。人の情は測り難けれど、顔面の表出は其の幾分を勢翫せしめ、言語動作は、之れを推定するの資を供す。

怒れば眼釣り口緊りて、語の勢ひも激しく、喜べば顔の容も緩みて、手の舞ひ足の踏む所を知らざるに至る。得意の時、失意の境、或は興奮し、或は沈静す。世故に馴れたる人、一見して其の心裡を洞察し難きにあらず。

彼の人相秘傳の書などに、

坐して居合腰なる人は分別なく、世話をやく人なり。

坐して尻の落ちつかぬは住處動き、家業の定まらぬ人なり。

坐して居なり正しく尻のおちつき威儀整ふ人は大福力なり。

坐してさびしく見ゆるは貧なり。

といへるは、此の感情表出を媒として諸種の類推を企てたるのみ。されど感情の表出は幾分意志を以て左右するを得べし。喜怒色に現はれざるの大人は之れを窺ふに難く、故意に喜怒を誇張する小人の技は常に欺かれ易し。我が心、我れ知る。所詮人の情や知り難し。

知己

人の心の知り難きと共に、我が心を人に知らしむるや難し。相識天下に

満つるも、知心それ幾人ぞ。人生の孤寂己れを知るものなきより悲しきはなし。知己を天下に求む。されど日夜相往來して猶ほ路傍の人の如き面友は之れを得べきも、肝膽相照らし、心を以て相許すの友や終に得難し。

心友

窮屈なる哉、人生。禮儀に囚はれ、習慣に縛せられ、一回の通信を忘るの故を以て不信を責むる人はあり、十年音信を絶ちて、しかも念々相忘れざるものに至つては少し。忘れねばこそ思ひ出さぬ心友一人を有するものは、又以て寂寥を天下に感ずるなけん。

友情

友情の濃かなるは、實に戀にも似たる哉。脈々として意氣通じ、綿々と

して情緒絶えず。唯だ人心の定め難きありて、我、彼れを思ふ温かなるも、彼れの已に冷かとなれるあり。彼れ未だ我れを忘れずして、我の已に彼れを忘れたるあり。離合常なく、集散定らず。冷熱も亦時に度を異にす。所詮、吾、我を力とするの外、頼むべきものなきか。

來往

我より足を運びて人を訪はんとするは、多くは何物をか其の人によつて得んとする心あり。來りて我を訪ふもの多く我れに求むる所あり。赴いて人に與ふるは、これ聖者の行履、來りて我を慰むるは、親友の至情。

離縁届

絶間なき夫婦喧嘩の仲裁に、したゝか苦められし仲人、仔細に雙方の申

し立を聴取りて、これでは未遂げらるべしとも思はず、此際斷然離縁するより外に策なし、心當りもあれば良き縁を探すべし、早速に離縁届に調印したまへといへば、雙方もごくして、今一應考へましてと、連れ立ちて引き退る。人情はかうしたもので或る人の語りぬ。

中直り

「犬も喰はぬ夫婦喧嘩」情激しては聲もあらく、女の謹みも忘れて泣き騒ぐ。山雨一過して山更に青く、

中直り元の女房の聲になり

穿てる哉、川柳子。一句、心的過程を道破す。

閻魔帳

世事葛藤、人情の反覆、死ぬの生きるの大騒ぎ。詮じ来れば色と慾、一切の罪惡は之れに萌し、一切の紛擾亦之れより生ず。

皆金と色だと閻魔帳をくり

萬事終了して、閻魔の應、人生を判決し来れば、一半の真相、此句にあり。

浮世の義理

色と慾とは人生の醜方面。別に美はしき義理なるものあり。道念より煥發し来つて一種の社會制裁となり、痛切に人生を支配す。近松が「長町女腹切」に、

世間多い心中も、金と不孝に名を流し、戀て死ぬのは一人もない。

といへるも、不孝の名を厭へる社會道德の其の一因たるをいひ、世間の手前、浮世の義理、これ人生をして益々紛糾せしむる所以。義理と義理との

葛藤、義理と人情の衝突、多くの悲劇を人生に現出す。蓋し義理は社會道德に従はんとする心の要求、人情は自己の愛憎に囚はれんとする心の傾向。義理を缺けば社會的生命を失ひ、人情に反すれば心に苦痛を感ず。戯曲小説に描かれたる主人公の煩悶は多く此の二者の軋轢に因し、吾等が日常生活も之れに羈絆せらるゝこと少からず。

義理の柵

人生の悲劇は、多く社會の道德と自我の感情との衝突に出づ。社會道德の爲に自我の感情を犠牲に供し、所謂浮世の絆に身を縛られ、義理の柵に情を制せられて、大破裂の大團圓に至る。近松は實に此の點に着眼して多くの悲劇を作成せしなり。彼れいふ、

淨瑠璃は憂が肝要なりとて、多くあはれなりなどいふ文句を書き、

又は語るにも、文彌節やうの如く泣くが如く語ること、我が作のいき方にはなきなり、それがしが憂は皆義理を専とす。
と。かくて彼れは天の網島に於ては女主人公小春が紙屋治兵衛の妻おさんに對する義理に我が戀を殺し、おさんは又小春への義理に之れを請出さんとし、治兵衛は又女房への義理を思ひ、二重三重なる義理の柵によつて、此の名作を出す。其他の作皆此の葛藤を主要とせざるはなし。
以後の淨瑠璃作者もこれに着眼し、人口に膾炙する『寺子屋』に松王が我子を身代とし、『御所櫻』に辨慶が我子を殺す、皆此の義理の柵に身を苦めし煩悶の狀に同情せしめんとしたるもの、從來の劇は多く此の套を脱せず。

新らしき悲劇

自己擴張、自我確立は近代の思潮にして、我をして習慣に囚はれ、儀禮

に縛せられず、自由に行動せしめんとする此の努力は、端なくも社會の風習と衝突し、こゝに幾多の懊惱事を演ず。イブセンの「ノラ」に於てもズーデルマンの「マグダ」に於ても此の衝突を見る。舊慣に囚はれても悲哀あり、放れんとしても煩悶あり、社會は自己に似んことを強要し、其の異なるものは之れを排斥せんとす、これ新人の嘗めざるべからざる苦痛なり。

第一人者

等しくこれ自己擴張、小我に執著して、徒らに社會の羈絆を脱して自己の氣儘を實現せんとするもとより非。大我を確立して社會をして自己に學ばしめんとするは、之れ先覺の士、而も其の似んことを強要する社會と相争ふや一。ヤン、フッスの火刑に處せられ、屈原の汨羅に投じ、近くは我が高山彦九郎の客舎に死するを免れしめざりしもの之れが因のみ。第一人

者は常に世の犠牲たるを免れず。支那に雁を捕ふるの郷土談あり。雁の夜眠るや、必らず一雁をして敵の襲來を監視せしむ。獵夫、能く之れを知り、頭を出して其の所に到るを擬す。番雁これを衆に報ず。衆雁氣づきて之れを見るの時、獵夫、頭を蘆荻の中に没して、その姿を隠す。衆雁以て敵にあらずとし、又眠に就く。少時にして又頭を擡ぐ。番雁之れを報ず。報ずるの時、頭を没す。衆雁又以て番雁の誤認とす。かゝること再三再四、衆雁終に番雁の報を信ぜず、其の無責任を怒りて之れを殺したる。此に於て獵夫、徐々として網を設け、終に悉くを捕獲し去ると。先覺の士の衆愚に苦めらるゝ概ね此の番雁の如きか。

利に争ふ

「犬が中よく遊んで居る時に、肴の骨を投げてやれば噛み合ひを始める」

相争ふべきの利なき時、人は調和し親睦するも、一たび利害の我が身に直
接なるもの起らんか、互に反噬すること亦此の犬の如きか。

さもしき人心

「死んだならたつた二分だといふだらう、生きて居たらば二朱もくれまい」
死者を憐むは美しき人情、二朱の金を惜むはさもしき人心。一首の鄙調能
く此の微妙の消息を喝破す。

貧乏人の系圖自慢

世間體をよくせんとするは人情、それには少なくとも自己が社會の水平
線下にあらざるを證明せざるべからず。「貧乏人の系圖自慢」今てこそ斯く
は零落れたれ、先祖はなぞと語るも、此の必要に出てたる卑しき人情。「家

には純金の茶釜がある。」虚偽を以て自己を扮飾せんとするも亦人情の常
ならんか。

借り著より洗ひ著

「借り著より洗ひ著」借りたる盛装よりも、洗ひ晒したりとも自己の衣を
纏ふに如かずと云ふもの、外見より一應の評価は衣服によるの外なし。
人に良く見せんと欲望は、借金を質に置いてまでの綺羅錦繡、洗ひ著よ
りは借り著に趨る人情。終に借金の衣紋竹となつて儚なき虚榮に其の身を
誤る。

自己の識認

人は社會に自己の存在を識認せられんことを求め、最早忘れつらんと思

ふ人の「貴方御久振りて」と挨拶せらるゝと心嬉しく、覺えて居ると思ふ人の「誰様でしたか、…ツイ御見外れ申しまして」と云はるゝと不愉快を感じるも、此の情より出づ。彼の商人が初めての客にも、「毎度有難う」との世辭を振り蒔くは、巧に此の心理を應用せるもの。或る人のグラッドストンの人望を得たるの一因は、彼れが地方選出の名もなき議員をも、其の面と名とを記憶して之れと談話を交換せるに由るといへるは、必ずしも皮肉の評言とのみいふべからず。

大なる恥小なる恥

播州明石の里胥鳥羽の三右衛門、老年に及び、誕生日に諸子弟一族を會集し席上にて謂ひけるは、「予が家、幸に貧しからねども、天に水旱の憂ひあり、人に不時の災厄もあるなれば、予が死して後、窮乏になることもある

べし。さもあらば、先づ第一に居宅を賣るべし、それにも防がれずば、重寶を賣るべし、次ぎに諸器物衣類を賣り、赤裸にて田地を作ると心得べし。世の大百姓と云はるゝものを見るに、窮乏のはじめに私かに重寶を質物にし、次ぎに諸器物衣類を質物とし、次ぎにだん／＼に田地を賣り、次ぎに居宅を賣る。居宅を賣れば手と身となりて、立ちよる方なきに至る。小恥を知りて大恥を知らず、愚といふべし。一番に居宅を賣るは、當時は恥なれども、それに準じて萬事を省略すれば、引きかへす道理、其の上田地さへあれば取りつながら、物ぞ、汝等必らず小恥を知りて大恥を招くことなかれ。」といひしと、南畝が『假名世説』に見えたり。家持が家を賣るは世間體惡しけれど、そは一時なり、此の恥を忍び難くて、終に耕すべき田もなきに至るは百姓の恥、世間體の爲に本末輕重を誤るは往々見得る所、老農の一言大に味ふべし。

長を語る

人は自己の優越を他に示さんとす。此に於て其の語る所を聴くに、皆自家廣告ならぬはなし。「筆疇」にいふ、

人の病は好んで其の所長を談ずるにあり。功名に長ずるものは、動もすれば則ち功名に誇り、文章に長ずるものは、動もすれば輒ち文章に誇り、遊歴に長ずるものは、其の見る所の山川の勝に誇り、刑名に長ずるものは其の斷獄の情に誇る。これ皆其の所長を露はして其の所長を養ふこと能はざるものなり。唯だ智者のみ其の所長を言はず、故に其の長を保つ。

と。長を語るも亦人情の弱點。長を養ふの一語眞にこれ反省の指箴。

出る杭

自己の優越を誇らんとする人情は、亦他の優越を望まざる嫉妬猜忌となり、之れを自家水平線まで引き下げずんば止まざる醜き感情あり。盛名の下に誹毀を絶つ能はず、出る杭は常に打たる、世の慣ひ。他を平化し凡化し去らんとす。三浦梅園會て戒めて曰く、

勝つことを好むは、人情の常、優れるを憎むは人慾のつねなり。此の故に材藝ある人は、尙ほ慎むべし。木、林を出づれば風必らず折るといへり。近頃材智は身敵といふこそ、中院通躬卿の御歌とて、うけたまはり侍りし、

人に見よちのが枝ならぬ花の香に

折りつくさるゝ梅の下枝

と。又いふ、

技藝は人の嗜むべきことなり。藝勝れたらんは、慎みもまたいよく重かるべし。さなきは人の妬に遇ふものなり。つらく之れを鑑みるに、我に甚だ勝れるものをば、其の失を求めて誹る。我に少しく勝れるものをば妬む。我と相敵するものをば、吾より劣れりとす。我れより劣れるものをば侮りあざける。これ藝に遊ぶ人の病なり。

と。藝に遊ぶもののみならず、これなべての人情、能く此の消息を體得して聊か世に通ずるを得むか。

通じ難からしむ

通じ難きは人情、益々これを通じ難からしむるは人の心。一を以て多を推し、他を以て一を量る。「假名世説」は風之翁といへる人の語を擧げていふ。

人情は通じ難きものなり。僅か五金十金のことにて死なねばならぬといへるも、實のことを知れば、力の及ぶだけは合力もすまじきものにあらねど、其のやうなる品を以て人の金銀をかたりとするものもあれば、又其のたぐひかと思ひて、取りも合はぬもの世の中に多し。されども其の者實のことにて、いよくたゞの義理にて死しなどすれば、さては實のことにてありつるよと、初めて驚き、かゝることゝも知らば、貸すべきものと思ふは誰しも同じことなるべし。

と。脱白に言明したることをも虚か實かと心惑ひて、終に自家に利便なる虚の方に解し去る。これ自ら通じ易きものを通じ難からしむるにあらずや。欺かるゝは愚なり、されど欺くよりはよし。盗らるゝは智ならず、されど盗るよりはよし。欺かれじ、盗られじと思ふが故に濫に他を疑ふ。欺かじ盗らじとのみ覺悟せば、自ら省みるの外、さしたる苦勞はあらず。

親子の間も

風之翁又いふ、「われ壯年の時、西國へ商ひに行きたるかへりに、播磨湯にて難風に遇ひ、命からうくに歸宅せり。其の時の物語を兩親にきかせなば、さぞ泣き出したまふらんと、其の後、そろくと折々話し出しぬれど、見ぬことなれば、それほどに驚きたまはず、たゞそれは怪我もなくめてたしといひたまふばかりなり。これ我が子を愛せざるにはあらず、無事に歸りたる故なり。もし片腕にても脱けて歸らば、そこては驚きもあるべし。されば親子の間にてさへ、人情は通ぜぬものと覺悟してより浮世も頼みすくなく思ひて隠遁せり。」と。情は主觀的なり、相通すること難し。風之翁の人情觀には半面の眞理あれど、自ら其の境に遭遇したると、過ぎ去りし物語と其の感銘と相通せざる寧ろ無理ならぬことならずや。

盗みする子

「盗みする子は可愛くて、縄取りが恨めしい。」これ親子の至情なり。正義の觀念の之れを抑へ、浮世の義理の之れを沮むも、止め難きは此の心。こゝに幾多の悲劇を生じ、葛藤を生む。孔子が「父は子のために隠し、子は父の爲に隠す、直きこと此の中にあり」といひしは、此の秘奥を看破せるもの。人情の美、親子の間より濃かなるはなし。

艶姿女舞衣

浄瑠璃の能く人情を寫せるは前にもいへり。彼の俗間尤も人口に膾炙する「艶姿女舞衣」酒家の一段。吾等は之れによつて人情の紛糾を看取す。女主人公が園が我れにつれなき夫半七を恨みず、其の身の上を案じくらせ

る戀愛の至情は楚々として人を動かすものあり。殊に半七の父半兵衛は、世間の手前、勘當をしながらも、身は半七の罪を引き受けんとし、お園の父宗岸は子の可愛さに娘を取り戻しながら、又其の可愛さに詫言す、這般の葛藤、真に人の至情を見る。宗岸いふ「思へば不孝者、よい時に勘當さつしやつて親に難儀のかゝらぬはまた此の上の仕合せと思ふたは他人の了簡、……よいことをしたと世間から譽める人もあらうが、親となり舅となるが、大抵深い縁かいのう、かういふ仕儀になつたときに譽めらるゝより笑はるゝが親の慈悲」と譽めらるゝより笑はれても厭はざる血筋の縁、吾等は此にすべての親心を體得せざるべからず。

兄弟の思ひ出

血縁は人情の最も濃かなるもの、親子の情は其の尤なるもの、兄弟に至つ

ては父母を連結線として相繋がるが故に、一たび其の連結の切れて、相互に感情の疎隔し、利害の衝突せんか、仇敵の如くに反目するものあるも亦免れざる所。備前池田光政公の領土に兄弟田を争うて奉行の勘解も耳に入れず、此の裁判久しく決せざりしを、侯は思ふ由ありとて、之れを儒臣泉八右衛門に命ぜられしに、八右衛門初めは其の職にあらずとて辭退せしかど、再三の君命に今はもだしかね、さらばとて兄弟を我が邸に呼び寄せ、今日は裁判を與ふべけれど、公用多端なれば、しばし此の所に相待つべしと、人なき一室に兄弟を入れ、冬の寒き日なれば、火鉢一つを供して朝より正午、正午より夜に入るまで呼び出さず、食事時には兄弟相並べて之れを與へ、いと鄭重に取扱はるれど、兄弟は、もとより相争へる身の兄は弟に弟は兄に相面することだに快からず思ひて、壁に向ひてありけれど、夜の次第に更け行きて寒氣いと身に染むに、火の氣の戀しくて、少しづゝ

火鉢の側に寄り、終には相對して手をかざすに至りぬ。されど互に物も言はず面膨らして居たりけるが、更けわたる夜氣に心も静りて、父母、未だ世にありたまひし時、其の膝下に、兄よ弟よと睦しく暮せし幼き思ひ出の胸に浮びては懐かしさの心。今、面前相對しても物さへ得言はぬ心違ひの恨めしく、思へば些かの行違ひに、睦じかりし昔を忘れての争ひ、公の手をも煩はす口惜しさよと悔恨の涙止めあへず、一點の靈火、心の暗を照らしては、兄は覺えず弟よと呼び、弟は思はず兄の手にすがり、昔の心に還りては、此の争ひも爲るべきにあらず、兄は弟に、弟は兄に、互に譲りあひ、されば願ひ下げに致すべしと兩人其の由申し出てければ、入右衛門は徐ろに人倫の道を説きて、さしも困難なりし裁判を決せしといふ美譚は、能く人情を悉くしたる處斷として傳へらる。古歌に

埋火のあたりのどかに兄弟の

まどひせし夜を戀しかりける
幼き思ひ出ほど、人の情を濃かならしむるものはなし、況て血縁の之れに加はる兄弟に於てをや。吾等は此の話題に於て學ぶ所多からざるを得ず。

死にともない

死を厭ふは人情、今までは人のことだと思つたに、おれが死ぬとはこいつたまらぬ」こいつたまらざる所、最も真情を流露す。此の點に於て金蘭齋の辭世ほど虚偽なきはなし。

東山の花見しも此の春をかぎりか、西山の月みるも此の夕かぎりか、
さても死にともないことぢや。
何人も死にともがらざるはなし。彼の鬼と呼ばれし本多作左衛門が、
死にともなふな死にともなふな

御恩を受けし君をおもへば
といへるは、武士道好個の教訓とせらるゝ所。彼れと此れと其の覺悟同じ
からざるも、其の死を欲せざるや一。而して彼れに人情の流露あり、此れ
に士道の骨髓宿る。

軽重

命を重しとするは一般の人情。されど世に命よりも名の重んずべきあり。
武士道多く之れに立脚す。或る國の兵士が其の死に臨みて「聯隊長殿、新
聞に出して下さい」といひしといふ話柄の如き、寧ろ人情自然の流露にあ
らずや。しかも名よりも重んずべきは道。事、自から軽重あり、輕さを棄
て重きに就く。永嘉先生いふ、「刃、頭目に在り、指を斬つて顧みず。病、
心腹にあり、膚を灼いて辭せず。豈に以て愛するに足らずとして之れを棄

てんや。これ必らず其の棄つべからざるものあつて其の愛を棄つるなり」と。
と。これ人情、しかも公情を以て私情を抛つもの少きも亦人情の弱所にあ
らずや。

蜂は能きな色に

公情の爲に私情を抛ち、大事の爲に小事を棄て、大處に大用を發揮せん
とする偉人も亦細事小私に於て動く所なき能はず。蘇東坡いふ、「人能く千
金の壁を砕くも、破釜に聲なき能はず、能く猛虎を打つも、蜂に色なき
能はず」と。千金の壁は人の最も惜む所、されど砕かんとするの覺悟あれ
ば何の惜む所なけれど、日常使用の素焼の釜一つも不意に破損してはハッ
と聲たてぬはなく、猛虎は人の畏るゝ所、されど勇を鼓しては之れに當る
べきも、不用意の時にはブーンと集り來る蜂一つに驚きの色を作さざるを

得ず。彼れ大にして之れ小、大に動かずして小に動く、こゝにも人情の至微を見るべし。

身を捻つて知る

大内義隆の妻、其の夫の都に上りて三年あまり歸らぬに、懐しく思ひて義隆の妾の近き所にあるに歌を贈りて、

身をつみて人の痛さは知られけり

戀しかりけり戀しかるらん

「我が身を捻つて人の痛さを知る」同情は我が心に経験あるものに於て更に深さを覺ゆ。逆境は同情の心を生み、貧者は富者よりも慈仁の心に富む。これ痛切なる自己の経験の能く他の境遇に同じ得るに因す。

六 憎

世の人の心は皆同じ、誰れも憎しと思ふは六ありとて、

金持ちて高ぶるほど憎きはなく、書を見ずして物識り顔するほど憎きはなく、人に物をやりて恩にさせるほど憎きはなく、吝きほど憎きはなく、慾ふかきほど憎きはなく、人をそねむほど憎きはなし。

と數へたる、柳里恭の言は人情の機微を穿ちていと面白し。

書籍は粹となる助

柳里恭は、人情の觀察に一隻眼を有す。彼れが其の著「雲萍雜志」に云ふ所、傾聽すべきもの多し。

學問して博聞多識となるは、人情を察して世路に行きとどかんが爲な

り。聖人賢者の世話やきたまふも、高ぶりて物知り顔せよとの教にはあらず。されば理に明かなりとて人を俗物と見下すべからず、その俗物の目より見れば、又高慢なるものは角立ちて至りて無益に見ゆるなり。君子は時として推し移りて、能く俗と交る。かゝるが故に俗物に入れられざればやはり俗物なり。學びの道は粹とならざれば質なり。かゝれば書籍は粹となるの助けなれば、知りて表へあらはさず、隠して入る時につかひ、不斷誇り顔なるは人更に用ひざるなり。

書籍を以て粹となるの助けといふ、彼れも亦一個の粹人なる哉。彼れが紅葉の詞に、

人と契らば薄く契りて末とげよ。もみぢ葉を見よ、薄きはおそく、濃きはとく散るものにて候。

と。交情の箴とすべし。其の修行の詞に、

花は雨の過ぐるにまかせて、紅ますく色を添へ、柳は風にもまろゝに從ひて、緑いよく深し。
といふ如きは、辛酸骨め盡くして眞價の漸く現はるゝをいへるもの、三翻に値す。

男と女

人情の美所醜所の最も明白に暴露せられ、葛藤紛擾のこれによつて激成せらるゝは男と女との問題なり。マクス、オーレルは男女の性癖を悉くして、「一人の男に悪く扱はれし女は、すべて男を悪くいへど、一人の女に悪く扱はれても、男は凡ての女を悪しざまには云はず。女のことを悪く云ふ男は、女を悪く扱ひし男なり」と。更に繰返して、「男を罵倒する女は、男に關して慘ましき經驗を有し、それを一般に推し及ぼせるか、然らざれば

人の噂によつていふもの、總ての女を悪くいふ男は女嫌ひの天性のみ」と。此語以て男女の性情を比量すべし。彼れ例の皮肉の口調を以ていふ、「男を悪くいふ女は間の抜けたる方法を以て自己の社會的失敗を廣告するに過ぎず」と極論し、「女の有する男に關する知識は非常に狭く限られたる範圍のみ」と。女の天地は狭し。冗舌以て彼れが過去を卜すべし。

色 氣

人情の美、其の源頭を尋ねれば、終に戀に入る。吾等が眞を望み美を求め善を尋ねるも、理想を戀ふる心のまこと、プラトインのいひけるアイデアの戀に外ならざるべく、理想に憧憬し人の心。肉慾に伴隨して考察してこそ戀は曲者なれ、若し此の如くに觀察し來らんか、彼の吉田の兼好が、色好まざらん男は、玉の杯に底なきが如しと見たるも、無理ならじ。柳里恭

此の立脚地より世態を觀じて、

年若くして色なければ無骨にしてしとやかならず。老いて色なければ慳貪にして邪見なり。世に色氣といふは専ら愛敬のつやをかねいひてあながちに姪欲のみにあらず。士として色なければ、人なづかず、農として色なければ物育たず、工として色なければ巧みなく、商として色なければ人間はず。天地の間、何ものも色なくしては、一日も世に立ち難かるべし。

と辯ず。さすがに書を読むの粹人、人生の色彩こゝに發す。更に美しき人情の源頭を説きて、

人倫の交り、慈の心より出でざるときは、仁、忠、慈、孝、柔和、愛敬その信ことごとく人情なし。親の子をおもふ心、死なんと覺悟したる心。この他は誠なし。此誠心戀慕より出で、戀情なき時は、不仁の君に忠

を致すものなく、不慈の親に孝を盡くすものなし。遠くは顔淵が吾猶ほ能くせん、詞、近くは右近が忘らるゝの歌、思ひやるべし。古歌に戀せずば人は心のなからまし

もののははれもこれよりぞ知る

戀は没我なり、同情なり、慈なり、仁なり、愛なり。人生を美化し、淨化するもの此の力より大なるはなし。

人情の琴線

謂ふ勿れ、人情悉く醜陋と。人の心は獸と相隣りすれば、しかすがに求めて已まざる本能の醜陋事を現出せざるにあらざるも、神に隣れる心性は慈仁となり、義侠となりて、弱さを扶け、強さを挫かんとす。慈仁の者の貴ばれ、義侠の風の慕はるゝは、これ人情の美所、長所。弱きものに對し

て哀愁の情を催し、強きものに對して反抗の心を懐く。弱者の苦めらるゝを見ては悲哀の涙に暮れ、強者の罰せらるゝを見ては、愉悅の情を湛ふ。微妙なる心理の琴線、人情の美に觸れては、淙々の響、稷々の聲、或は悲壯の曲となり、哀愁の調となる。

共鳴するもの

哀愁の談を聽いて誰か身も心も共に引き入れらるゝを感じざらむ。壯烈の擧を見ては、懦夫も亦蹶然として立つ。よし其の事の假想の事實として劇に脚色せられ、架空の談として小説に仕組まるゝも、演じて真に迫り、描きて其情を盡くせば、吾等は之れに同情することによつて多大の快感を生ず。此の快感を生ずる所以のもの、心裡に共鳴する所あるが故にあらざるか。孔明の出師の表を讀んで泣かざるものは其の人必らず不臣と。孔明

たる能はざるも吾等は之れと共鳴するものあり。

天下萬人の心

吾等が文藝を味ひ、僅かな文字に動かさるゝ所あるは其の作品と共鳴する所あるのみ。共鳴するなくんば風馬牛相聞せず。高きものは高き心と共鳴し、卑きものは卑き心と共鳴す。其の響の大小は即ち感興の厚薄、其の趣味の高低は即ち品性の上下。古人は『西廂記』を評して、此の作、天下萬人の心より盗み來ると。これ天下萬人をして賞賛せしむる所以。シエクスピアは第二の自然なり、第二の能造なりと云はるゝ所以も、亦材を人心の秘奥に求めて此の千古の作を出せしにあり。深酷にして直に胸を射る、萬人の心は忌憚なく、此に描寫せられしなり。

心と心

心と心との結合

心と心とを結合するは愛の力あるのみ。人倫の美、社會の和、皆之れによつて出づ。

天の原ふみとどろかし鳴る神も

おもふ中をばさくるものかは (古今集)

利刃も斷つ能はず、鬼神も妨ぐべからず、千里の遠きも以て之れを隔つる能はず、山河の險も之れを沮む能はず。權、以て人を服せしむべし、利、以て人を誘ふべし。權を以て服せるものは、畏服にして心服にあらず。唯だ其權に畏れて之れと結ぶも、心と心と相結ぶにあらず。利を以て誘ふも

のは、又利によつて離る。真に心と心とを結ばしむるもの唯だ愛あるのみ。

優勝劣敗

個々皆心を異にす、しかも其の秘奥には脈絡共通せるものあり。之れに觸れて相感じ、相動く。しかも其の間又優勝劣敗の則あり。強き心は弱き心を征服す。操持堅からざるもの堅きものに動かされ、思慮深からざるものの深きものに動かされ、知見明らかならざるもの明らかなるものに動かされ、愛情濃かなるもの淡きものに動かさる、皆此の理に外ならず。

心の水平

徒らに他の我を思はざるを恨む勿れ、自ら我が愛の足らざるを想へ。人

の心は猶ほ水の其の平を求むるが如く、我が愛の源頭高ければ、他をして其の程度に引き上ぐるを得べし。我れ却て彼れの我れを思はざるを恨みんか、これ我が心をして彼れの水平に引き下ぐるなり。弱き我が愛の強き彼れの無情に敗るゝなり。愛憎彼れにあらずして我れにあり。柳里恭いふ、人の信はおのれが信を以て引き出だし、人の偽もおのれが偽より引き出すものなり。偽も遂ぐるときは信となり、信も遂げざる時は偽となれり。されば嘘も誠も交るものゝ心において、おのれ誠ありて人に嘘あることなく、おのれ嘘ありて、人に誠あるべからず。唯だ人としてむづかしきは心の疑ひ一なり。

眞偽も亦我が生む所、我れ之れを信じて彼れをして偽る能はざらしむべく、我れ之れを疑うて彼れをして偽に陥らしむることあり。水戸光圀が領内巡視の時、親孝行には褒美を下さると聞きし名代の不孝者今日ばかりは

老母を脊負うて孝行者然と行列を拜せしに、「あの者の心掛け感心なりとて褒美を與へんとするに、左右の者、あれは名代の不孝者、褒美ほしさに今日のみは孝行の真似をしたるなりといへば、光圀、真似にても孝行は結構なり、益々親を大切にせよといひて毫も疑ふ色なかりしに、偽り變じて真となり、其の者も亦其の行ひを改めしといふ有名なる逸話は、此の心を語るものにあらずや。

感化と誘惑

物、平を得ざれば鳴る、人の心も亦他と其の平を得んとするの傾向あり。彼れをして我が水平に引き上ぐるを得ば我が感化其の功を奏したるなり。我をして彼れの水平に引き下げしめんとするは誘惑の手の加はれるなり。感化は善きもの高さものに平を得せしめんとするの努力にして、誘惑は悪

きもの低きものに從はしめんとする手段なり。こゝにも引力の理法は應用せられ、上げんとする感化は努力多くして其の功少く、下げんとする誘惑は努力少くして其の力還て多し。

高僧の感化

吾等をして二三の高僧に就き其の感化を語らしめよ。優陀那院日輝上人は近世の碩學、其の門に遊ぶもの殊に多し。中に一人の盜癖あるものあり、學頭新居日薩、偶々其の管する所の財庫を奪はれ、事を上人に告ぐ。上人、盜られぬ用心こそ肝要なれといひて又其の僧を糺さず。日薩注意周到なれど、日ならずして又奪はる。二たび出てて之れを告ぐ。上人平然たること前の如し。日薩耐りかねて、

「あのやうな者が居りましては、到底學寮の締りも出来ませねば、何卒あ

の者を追ひ出し下され、さなくば私に御暇を下され。」
といふに、上人は、

「されば氣の毒ながら、今日より汝に暇をとらず。」

意外の一言なれど、もとより自から言ひ出せること。日薩は、

「かやう仰せられては、何とも申様もなき身なれど、長年の間、御側に侍き、不束ものゝ行届かぬ勝てござりますれど、教に背きしことは仕らぬと存じ居りまするに、其の私を追ひ出しても、あの泥棒を御留め置きなされるは、チト御恨めしく存じます。」と啣てば、上人は、

「汝にさう感ぜられては迷惑なれど、汝は長年の修行、今は一人前の僧侶として恥かしからねば、此寺を出ても世の用に立つが、あの心の曲つたもの、幸ひ此寺に居るから罪人にもならぬが、追ひ出しては、どのやうなことをして公儀の厄介になるかも知れぬ。さうなつては人一人を無駄

にすることになる。縁あつて師となり弟子となつた以上、何うかして、あの者の根性を矯め直さなければ師たるものゝ務めがすまぬから、罪のない汝を追ひ出しても、罪ある彼の者を留め置かうといふたのぢや。」と。何等の慈悲ぞ、何等の權威ぞ。日薩は深く我が心の到らざりしを恥ぢて過言を謝し、盗みする僧も此の事を洩れ聞きて、師の慈悲の厚きに感泣して終に持戒堅固の僧となりしといふ。此の一話は盤珪禪師にも相似たるありて、或る結制の時、しばし金品の紛失するに、多くの雲水、誰れか彼れかと探りて、終に其の人を得たりければ、一同、禪師の前に出て、「彼れを追ひ出して下され、然らざれば一同下山いたす」と迫るに、禪師は、「かゝる心の曲りたるものをこそ、矯め直す法門、下山いたしたきものは下山せよ、衲は其の者一人なりとも教化せてや止むべき。」と云はれし一言に其の者の心改たまりしといふ。博多の仙崖和尚の逸事と

して、異彩ある感化談を聴く。仙崖和尚の住せられし博多聖福寺の近傍に絃歌絶えざる柳町の遊廓あり。和尚會下の若僧、夜、密かに塀を越えて耽溺を試みるものあり。彼等、踏臺を塀内に置き、之れを足繼ぎとして出入に便す。和尚、之れを聞きて身の不徳を恥ぢ、夜陰に乗じて其の踏臺を除き、代つて其の所に坐禪して徹宵動かず。曉近くに歸り來りし彼等、先づ塀を越えて踏臺と思つて足を留むれば、大和尚の寂然として坐するなり。驚き飛び降りて地に平伏す。第二の者は第一の者の此の狼狽を知らねば又塀を越えて和尚の頭を踏まんとし、これも驚きて地に伏す。第三第四相繼いで降り、相共に其の罪を謝す。和尚慨然としていふ、

「佛祖の一大事を究明するには、身命をも賭せざるべからず、今汝等其の重任に當りながら足を遊里に運び、内は佛祖の戒めを破り、外は不徳の人となる。これ皆納が感化の至らざる所、願くは汝等諸人の足下に踏ま

るゝことを得ば、聊か以て罪を佛祖に謝するを得んか。」

と言々涙下る。爾來復た一人の此の擧に出るなし。吾等はこれらの話を耳にして頑石をも點頭せしむる彼等が偉大なる感化力に隨喜せざるを得ず。

没我は結合の母

我れ彼れの心に入り、彼れ我が心に入る。二者渾融以て相結ぶを得べし。彼我其の心域を守り、彼れは彼れたり、我は我たるに於ては終に相結ぶの機なし。没我は結合の楔子、我執は隔離の本源。千里も相結び、比鄰も相隔つる所以、一に此に存す。

主従の情誼

安積良齋の『問話』は加藤嘉明と其臣河村權七との間に左の美談を傳ふ。

河村權七は名譽高き武功の士なり。慶長五年關ヶ原の亂に、加藤の夫人を守護して大阪にあり、加藤は東照公(徳川家康)に屬し、奥州に向ふ。石田三成、衆議して諸侯の妻子を大阪城中に取り入れんとす。權七其の時夫人の覺悟を聞き、若し夫人の柔弱にして城に入らんとせば刺し殺して主人の關東へ歸屬の心を決せしめんと、夫人に伺ひしに、夫人も其の心を察し、城には入るまじ、是非かなはずば人手にかゝるまじ、汝も戦死すべしとあり。河村大に悦び、俄に夫人に鎧を著せ、女中には半具足を著せ、馬上に帕著して兩刀を佩びさせ兵を整へて邸を出たり。諸侯の夫人これを聞いて、いづれも此の如し。關ヶ原の戦ひには權七力戦して功を立てたり。其の後、心に應ぜざることありて、一封の書を留めて出奔す。書中に立退くと雖も、二君に仕へず、當家一大事の變あらんには、何れの國にありとも驅け付け御用に立つべしと

あり。これより河村は諸國を浪遊し、後には路費盡きて出羽の國に修験者となり日を送る。大阪冬御陣のこと起りし時、加藤黒田福島の家は江戸にあり、河村之れを知らず、定めて出陣と思ひ、出羽より速に馳せ上り夜中邸に來り、親友を呼びて罪を謝し謁見を願ふ。嘉明大に悦び、速に對面して舊祿の通り八百石を賜はる。其の後勘定奉行來り俸祿受けらるべしとて夥しく金銀を陳列し、年々祿高除き置く分、一萬千二百石の代金十四年分受けらるべしといふ。河村大に驚き十四年の間は浪遊して出勤せず、いかで俸祿を受くべきと固辭しければ、嘉明尋常の心にては左の通りに思ふべし。しかし權七立退く節に一書を留め二君に仕へず當家一大事あらば何れの國にありとも驅けつべしとあり。其の言の如く他に仕へず、艱難を凌ぎ、此度、遠國より驅け來りし忠誠比類あるべからず、されば十四年の祿を主人横領すべ

きやうなければ悉く與へしとありしかば、權七、感涙を流し拜領しけり。これが孟子の三年還らず其の田里を收むるの意よりも更に深き恩澤にて千古の美談なり。

河村權七、一たび退轉するも嘉明を主とする心を失はず、嘉明、能く又之れを臣とするを忘れず、心と心と相結ぶ主従の高義、此の美談を傳へたる所以。豊太閤の未だ羽柴筑前守たりし時、家中の侍、暇を願ふものあれば、暇乞を致すべければ館に參れとて呼び出し、自身、茶を立て、饗應し、腰の物など與へ、

「何方へ參るとも、思はしからぬことあらば、またく歸り來れ、いつにても抱へ參らすべし。」

と懇にいはるゝに、暇を乞ひしものも涙を流して或は思ひ止り、或は終生其の恩を忘れざりしと。之れ實に人を使ふ者の心得べきことにあらずや。

感 染

「主が主なら家來まで」人は模倣の動物なり。心と心とは感染し、人格と人格とは映發す。勇將の下に弱卒なく、明君の下に賢臣多し。赤穂四十七士の義人たるを知るものは、又之れを産み出せる淺野長矩の士を愛するのと深きものありしを知らざるべからず。「此方て思へば彼方ても」語は卑野なりとても、能く心と心との關係を道破す。

使ふ者使はるゝ者

使ふものは、使はるゝものをして能く我が心の如くならしめんことを求め、使はるゝものは使ふものをして能く我が心を知らしめんことを望む。使うて我が手足の如くなれば使ふ者満足し、使はれて、知己を感ずれば死

も亦辭せず。人を知るの難きは猶ほ己を知るの難きが如く、使ふ者此に於て適才を適所に置くの明を缺き、使はるゝもの亦其の意の存する所を察せず。彼此睽離して反目之れより生ず。

心内の透視

人を見るは外貌のみ。容儀に誤られ、服装に惑はさる。其の漸く發するものは言語のみ。甘言耳を欣ばし、苦言心に悖ふ。耳を欣ばすものを愛し心に悖ふものを憎む。愛憎の情一たび心に動いては、明察の智光、其の爲に曇り、正を卻け邪に従ひ、理を棄て、非に就き、身を亡ぼし家を破りて顧みず。愛憎の情を去りて明察の智を磨き、外に出る所のものに迷はずして、内に思ふ所を透視し、初めて以て人を見ることを得んか。

人を見るの明

一舉手、一投足も人格の發露。一言一行も其の心の反映ならざるはなし。微を察し、細を見る、下駄の脱ぎやうにても其の人を知るべく、煙草の喫みやうにても其の氣質を見るべし。或る人いふ、「吸口の嚙み付けたるは氣の短さを示し、穩かなるは心の平なるを見る」と。さる會社にて募りに應じたる多くの書記を試験すとて、長く待たせ置き、さて一人々々呼び出して、重役の

「最早用なし、速に歸れ。」と勵聲一番すれば初めは靜かに扉を開き來りしものも皆失望と憤怒とに驅られて開け放ちたるまゝに出て行くに、唯だ一人、靜かに一禮して元の如く出て行くものありしを見て、此人こそ採用すべしと定めしといふ一話も

亦人物鑒識の機微を洩らせるもの、「東湖集」に

雪堂の行和尚、薦福(寺名)に住す。一日、暫到の僧に問ふ、何れの處よりか来る。僧云く、福州より来る。雪堂いふ、沿路に好長老を見ずや。僧の云く、近ごろ信州を過ぐ、博山の住持本和尚、曾て拜せずと雖も好長老なることを識る。雪堂の曰く、安んぞ得て其の好僧たるを知るや。僧いふ、寺に入つて路徑開闢し、廊廡修整す、殿堂の香燈絶えず、晨昏の鐘鼓分明にして二時の粥飯清潔なり、僧行、人を見て禮あり、此を以て其の好長老たることを知ると。雪堂笑つて曰く、本和尚はもとより賢なり、然して汝も亦具眼なりと。これ其の末を推して本を識るもの。人を見る當に此の如くなるべし。

眼に涙

「口には云へど眼に涙」口に云ふ所を聞いて直に其の人の本心なりとするものは、未だ真に人を見るの明あるにあらず、眼に催す暗涙に其の人の忍ぶべからざる情を察して、稍其の心を知り得たるものとすべし。然れども、剛毅の人能く情を制す。劇作家の理想化によるとはいへ、「伽羅千代萩」の政岡は我が子の死に對して涙一滴溢さぬ氣丈さに、榮御前をして其の心事を曲解せしめたる如き、其の一例にあらずや。人を見るの明や得難し。

主將の法

「主將の法は務めて英雄の心を攪るにあり」と。高壓手段を以て之れを畏服するは其の策の最も拙なるもの、利祿を以て誘ふは又以て利祿の爲に離れしむる所以。心を以て結ぶは彼れをして其の及び易からざるを知悉せしむる其の一なり、公明正大、偏私なきを知らしむる其の二なり、身を以て

範を衆に垂るゝ其の三なり。我が心を彼の心の中に置くに至つて英雄も亦以て我が手足たるを得んか。呉起の出でて魏に將たるや、卒に疽を病むものあり、起、爲に之れを吮へり。卒の母、聞きて之れを哭す。人あり怪みていふ、汝の子は兵卒のみ、將軍親ら其の疽を吮ふ、何の哭することかあらむと。母いふ、然らず、往年吳公其の父を吮ふ、父戰ひて踵を旋らさず、終に敵に死せり、吳公、今又其の子を吮ふ、妾其の死所を知らず、之れを以て哭すと。呉起の士卒の身を見る、我が身の如し。之れ其の卒の死敢て辭せざる所以。諸將の心を攪る之れより善きはなし。

思ひしより

山崎合戦の時、堀尾吉晴の士、則武三太夫、敵陣に飛び込み、首級を得て吉晴の前に至る。吉晴、

「思ひしよりも出かしたり。」
と詞をかけしに、三太夫は怒つて、
「思ひしよりもとは何事に候、かゝる時は大將も目の暗くなるものにや、よくく三太夫の取りたる首級を御覽ぜよ。」
と罵るに、吉晴も
「憎き高言かな。」
と云ふまゝに刀を抜いて斬りつけられしに、三太夫は眞一文字に敵の中に駆け入り、又首級を得て、

「されば此の度のを御覽候へ……主と事へる人に我が力を認められぬ口惜しさに、討死と覺悟して斬り入りしに、復もや生き延びて候。」
吉晴も一旦の怒りを悔い、惜しき武夫を失へりと思ひ煩ひし時なりければ、大に悦び

「汝を先に賞めたる詞、賞する餘りに思ひしよりもといへるなれど、思へば之れ剛の者に云ふべき詞にあらず、我が過にてこそあれ。汝が二度の先驅け大に優れたり、汝ならては……」

と云はれしに、三太夫の心も解け、主従水魚の如くに親しみしと。主は己れを知らじとの三太夫の憤慨、過を悔いて剛の者に云ふべき詞ならずと悟りし吉晴の述懐、當時の主従關係、髣髴として此の一話の中に現はる。

恩と威

古人いふ「恩は宜しく淡よりして濃なるべし、先に濃にして後に淡なるものは人其の恵を忘る。威は宜しく嚴よりして寛なるべし、先に寛にして後に嚴なるものは、人其の酷を怨む」と。これ人に接するの要道、恩濃かなれば狎れ、威寛なれば侮る。初め淡にして後濃、初め嚴にして後寛なるは

以て此の憂を去るに庶幾からん乎。

同情の外縁

我が心を以て彼れの心に置くは、心と心とを結合せしむるの要件なりと雖も、亦外縁の之を助くるものなきにあらず。順境の者は同情薄くして逆境のものは同情厚く、全然境遇を異にするものには同情疎にして境遇を同するものには同情深く、自己の曾て其の境を経験し來れる事象には同情動き、経験以外の事象には此の心動き難し。「子を持つて知る親の恩」も是れ現在の境遇によつて過去を追想したるに外ならず。利害を同するもの間には同情の念多く存し、利害の没交渉なるものには此の念少く、血縁近きものに此の情の濃かなるを見、其の遠きものに淡き皆此の外縁なり。

以心傳心

人生不言の妙あり。唯だ心を以て心に傳ふ。釋迦、華を拈して滿座の聽衆其の意を解せず。獨り摩訶迦葉の微笑するあり。釋迦此に於ていふ、「我れに正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の法門あり、汝、摩訶迦葉に付囑す」と。これ禪家の所謂以心傳心の法門なり。知解相如き、悟了其境を同うして初めて此の如きを得べし。英雄、英雄を知り、達人、達者を觀ず。しかも解、異なるものは見て以て會せず。境、同じからざるものは聽いて以て其の何の意たるを解せず。吾等が英傑の行動を見て凡慮の及ばざるを嘆じ、禪家の公案に接して鐵を噛むの感あるもの、一に其の境に到達せざるに因す。

心解體得

試に禪の商量を見よ。其の解し易きものに就きても、尙ほ吾等の體得し能はざるあり。慧可、達磨に對つていふ、和尚我が爲に心を安んぜよと。磨いふ、心を持ち來れ。慧可良久していふ、心を求むるに不可得なり。磨いふ、我、汝の爲に心を安んじ畢ると。慧可言下に悟得す。道信、僧璨を禮していふ、和尚、願くは解脱の法門を與へよ。僧璨いふ、誰か汝を縛す。信いふ、敢て人の縛するなし。璨いふ、何ぞ更に解脱を求めんやと。信直に大悟す。これ此の話頭も慧可にあらざれば會せず、道信にあらざれば悟らざるものあるにあらずや。若し其の解し難きものに至つては、梁武帝、誌公に囑して金剛經を講ぜしめんとす。誌公辭して之れを傳大士に囑す。大士、宮中講經の堂場に坐し、一句を講ぜず。案を揮ふこと一下して

下坐す。誌公傍にあり、武帝に耳語していふ、陛下還つて會すや否やと。帝いふ、會せずと。誌公いふ、大士の講經既に畢ると。大士と誌公と相通じ、武帝終に之れを得るに至らず。禪は情慮を超越し、差別を踳跳す。これを天地と同うして稍會するを得べし。

僧あり、雲門に問ふ、如何なるかこれ超佛越祖の談と。彼れは佛意を超え祖意を離れたる佛敎玄々の旨を聽かんとするなり。雲門いふ、糊餅。彼れは之れによつて玄々の旨を語り悉くせしなり。

慧超なる僧あり、法眼禪師に問ふ、如何なるか、これ佛。答へていふ、汝はこれ慧超。一語能く人々脚下即ち黄金地なるを示す。僧あり、超州和尚に問ふ、如何なるかこれ超州。州いふ、東門、西門、南門、北門。超州、投子に問ふ、大死底の人却て活する時如何。投子いふ、夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。

これらの話頭、其の機にあらざれば通ぜず、其の人にあらざれば會せず、公案をして工夫に資せらる。練心修行、其の境に到らば破顔微笑するを得んか。

禪の問答

禪の問答は心と心との試合なり。公案は名家の心法を傳ふるもの。一休禪師、初めて一路居士に會す、忽然問うて曰く、
「萬法道あり、如何なるかこれ一路。」
居士答へていふ。

「萬事休すべし、如何なるかこれ一休。」
と、意氣此に投合す。蟪川新左衛門の一休を訪ふや、一休いふ、
何をがなまゐらせたくは思へども

達磨宗にて一物もなし

と。新左聲に應じていふ、

何物もなきをたまはる心こそ

本來空の妙味なりけり

宇宙の妙此の中に活躍す。由來禪家の問答玩味更に意の深さを覺ゆ。近

世の龍象原坦山、鳥尾得庵に對うて、

「此頃本心を落したものがあある筈ぢや。」

得庵いふ、

「落したものがあれば、拾うたものもあらう。」

「愚僧が拾うた。」

「拾うたらば早く落し主に返やさッしやれ。」

「屈けてからにしようよアッハ、ハ。」

單に戲謔として見る勿れ。多大の教訓は此の中に存し、無限の情趣、言外にあり。

間、髪を容れず

機々相契うては間髪を容れず、心を以て心に傳ふ、神會妙悟。人あり、

曾て之れを諭示していふ、『彦山權現』の淨瑠璃に毛谷村六助の

「さては吉岡一味齋殿の」

といふに對して、

「娘の園でござんす。」

と答ふる此の刹那何の距離もあり、何の間隔かあらんと。兩語融合して

一句を成す。神會妙悟、亦此の如くならざるべからず。

氣合

心の強きものは、其の弱きものを制す。此の一般原則は、智に於ても、情に於ても、意に於ても應用せらる。智あるもの、智なきものを制し、情濃かなるもの、淡きものを服し、意力强盛なるもの、其の羸弱なるものを破るは見易からざるの理にあらず。殊に此の心を一所に集注するもの、其の散漫なるものを制するは氣合術に於て之れを見るべし。氣合は其の一所に集注したるの心を以て、對者の集注せざる所を伐つなり。彼れの全力を注がざる所に我が全力を以て之れに當るなり。常に此の集注を心掛くるは氣を練るの工夫にして、事あるに當つて驀直に進前するは氣を施す所となり。氣を練るは之れ其の靜的工夫にして、氣を施すは動的活力、泓として波なき碧潭、沿岸の樹木、其の影を宿すは靜的狀態にして、一たび決

すれば石を噛み岩を碎いて奔流するは動的狀態なり。靜なること林の如く疾きこと風の如きは氣合の要義。靜的工夫なきものに動的活力なし。散漫豈に能く集注に抗せんや。

機先

心力を一所に集注し、機を見て之れを放たんとす。故に彼れの心未だ齊はざるに我れ先づ之れに當る。彼れに油斷あつて、我れに之れあるなし。其の能く機先を制し、奇勝を博する所以のもの一に此に存す。一事一藝に堪能なるもの、常に其の藝に心力を集注し、坐臥之れを忘れざるが故に、漫に他に瞞せられず。傳へいふ、昔、一劍士の某侯に聘せらるゝあり。侯之れが技倆を試みると欲し、其の召されて室に入らんとするや、壯士をして突然撃つて掛からしむ。突嗟の場合、劍士は懷中の小風呂敷を取つて之れ

を投ぐ、壯士のそれに向つて刀を下さんとする間に進んで次の間に入る。侯、豫め敷居間近に席を設けて、之れに坐せしむ。劔士、平伏すれば其の頭、敷居の上にある。電光石火左右の襖を閉ぢ来る。劔士の頭は將に挟ま

れ了らんとして、襖動かず。悠然、敷居の上の鐵扇を取り、

「さあ御閉めなされ。」
侯其の無禮を謝して之れに師事すと。渾身これ武術、起居其道と離れざる所に、技の妙を見る。

心越の膽力

明の東阜心越禪師の歸化して我が水府にあるや、水府侯光圀、其の定力の非凡なるを敬し、曾て之れを試みんとして、禪師に勸むるに酒杯を以てし、其の之れを口にせんとする一刹那。豫め用意したる大砲を放たしむ。

しかも禪師泰然として其の手にせる酒杯寸毫も動くなし。侯の

「イヤ御無禮を。」

と云はるゝに對し、

「發砲は武門の常事、別に御斟酌には及びませぬ。」

と、意に介せざるが如し。彼れの心に油斷なし、大砲、耳を過ぐれども、何の驚くことかあらむ。靜かに水府侯の杯を手にして將に口にせられんとするを見て、突如、

「カアーツ」

一喝天地に震ふ。侯、驚いて酒杯を落し、禪師に向つて之れを難詰するあらんとす。禪師、機を見て平然としていふ。

「棒喝は禪家の慣ひ、別に斟酌は仕りません。」
と。一話、人口に膾炙す。

油断なきを以て油断あるに應ず。機鋒真に自在なるものあり。

拳骨和尚

更に一話の禪僧に關するものを擧げしめよ。備後の僧物外、膂力絶倫、人呼んで拳骨和尚といふ。曾て京師に遊び、途偶々新撰組の驍勇近藤勇の道場を過ぎ、門前にありて二三士の劔を角するを見る。出家の身として武士の道場を覗く、定めて心得あるべしとて、氣早の若侍無理に引き入れて試合を和尚に挑み、固辭すれども聽かず。矢庭に竹刀を以て打ち掛かるに已むを得ず、手にせる鐵如意を以て之れに對し、終に之れを打ち据う。最前よりの技倆凡ならずと見たる近藤勇の

「武士の道場へ亂入しての無作法、出家とて容赦はせぬ、イザ某と眞劔の試合せよ。」

と、威丈高に言ひ罵るに、和尚はさまざまに云ひ解けども許さず。槍引きしごきて之れに對するに、

「さらば御相手仕らん。」

「然らば得物は何なりと望まれよ。太刀なりとも、槍なりとも、用立てん。」

「イヤ出家の身のそれには及ばず、此の應量器にて事足るべし。」

と、禪僧の行李の中に入れたる飯具を出し、飯碗と汁碗とを以て天地に構ふ。小癩なる賣僧の一言、イデー突にしてくれんと、怒火心頭に發して、ヤツと突き出す槍先を、兩腕を以てピタリと挟む。引けども押せども、大盤石に壓せられたる如く、少しも動かず。こは敵はじといらつて突き込まんとする處を、機を見て、和尚は兩腕を離すと共に、大喝一聲。機を打たれて勇の體は二三間先へのめりしを見て、

「これでよからう。」

其の力量に感服せる勇は、無禮を謝して其の名を問ひ、世に名高き拳骨和尚なりしを知りて大に慚愧したりといふ。此の間、吾等は力量以外、心機の活躍せるを覺ゆ。

劔刃上の一句

上泉伊勢守信綱は劔道陰流の始祖と云はる。彼れ曾て某村を過ぐ。郷人の民家を圍みて頗る喧擾を極むるあり。信綱、就て其の故を問へば、郷人答へて一個の兇漢あり、人を殺して此の家に逃込み、一童兒を捕へて質とし、捕へんとすれば其の子を殺すといふ、捕へんとすれば其の子を見殺にし、捕へざらんか狂暴益々甚し、これ此の喧擾を致す所以なりと告ぐ。信綱我れ爲に其の子を取り還さんと、通りかゝれる一僧に請うて其の法衣を借り、髪を剃つて僧風を扮し、握飯を懐にして其の家に入り、徐ろに兇漢にい

ふ、我れもと慈悲を以て行とするもの、捕はれたる子も定めて飢を感じつらん、請ふこれを與へよ、とて一個の握飯を出し、更に、汝も亦飢多つらんとて一個を出し、兇漢の之れを取らんとする一刹那、直に飛び掛つて其の手を取りて、之れを振ぢ伏せ、難なく童兒を取り還し、且つ其の兇漢を縛して之れを郷人に與ふ。電光石火の働き、先の僧、嘆賞措かず、君はまことに豪傑の士にして能く劔刃上の句を悟り得たりと、帶ぶる所の化羅を信綱に授けて去る。其の僧の何人なるや之れを知る能はずと雖も、信綱の此の心機を捕へたる真に通達の人といふべし。澤庵の「太阿記」にいふ、

通達の人ハ刀を用ひずして人を殺し、刀を用ひて人を活す。殺さんと要せば即ち殺し、活さんと要せば即ち活す、殺々三昧なり。活々三昧なり。是非を見ずして、しかも能く是非を見、分別を作さずして、しかも能く分別を作す。水を踏むこと地の如く、地を踏むこと水の如し。

若し此の自由を得ば、盡大地の人、他を奈何ともせず。といへるも此の心機を指すか。

心機

六韜に曰く、「鷲鳥の將に撃たんとするや、卑く飛んで翼を斂め、猛虎の將に撃たんとするや、耳を弭れて俯伏す。聖人の將に動かんとするや、必らず愚色あり」と。静かなる所に心機具はる。鷹立睡るが如く、虎行病むに似たるもの、皆これ勢力の蓄積なり。蓄積する所、多きが故に用ふる所必らず功あり。

氣を以て勝つ

山岡鐵舟の幕命を帯びて駿府に使用するや、途上小田原を過ぐ。官軍の警

戒頗る嚴にして銃劔を以て左右を圍む。鐵舟、平然として無人の境を行くが如く、勵聲していふ、「朝敵徳川慶喜の臣山岡鐵太郎、罷り通る」と。左右茫然として能く之れを止るなし。彼等は銃劔を頼み、これは頼むなさを力とす。之れ氣を以て他を壓せるなり。當時勝海舟に就ても亦一話の傳ふべきあり。海舟、江戸城明渡し故を以て幕臣の憤激を買ひ、血氣の徒の一日之れを途に擁して銃殺せんとす。海舟知らざる爲して其の前を過ぎ、願みていふ、

「ソナナ構へて人が打てるか。」と。其の人逡巡して容易に放たず。海舟、悠然として去る。用意なきを以て用意あるに對し却て敵をして機を逸せしむ。これ亦心を以て心を制せるものにあらずや。

心の怪

心の變態

無常暴流の如き吾等が心は變轉して須臾も住まらざれど、其の間、心の本流となりて一生を貫くものあり。これあるが故に幼時と老年と其の智識其の感情同じからざるものあるも尙ほ我たるを失はず、我は實に意識の統一によつて成立し、人格はこれによつて定めらるゝものなれど、我が心に入り来るものは、其の本流となれるもののみならず、深く下層に潛みて必ずしも方向を同らせざる暗流あり。之れを本流の顯在的なるに對して潛在意識と名く。固より吾等の心は曾て顯在的なりしものが潛在状態に沈み、潛在的なりしものが顯在状態に浮ぶことありと雖も、普通の場合には其の間

連絡の存するものあつて本流は依然として同一方向に走るも、時としては本流と暗流と全く連絡を絶ちて二個の方向に走り、又はこれまで本流として顯在状態を維持せしもの俄然として潛在状態となることなきに非ず。かゝる場合には或は二重人格となり、或は人格の變換となる。これらの状態に向つて研究の歩武を進むるを變態心理の領域とす。變態心理は現代に於て多大の發達を遂げたりと雖も、尙ほ未決の問題の其の前に横はるもの多く、下可知の領域の依然として神祕の雲に覆はるゝもの少からず。こゝに云ふ所の如きは、其の僅に説明し得たるものの二三のみ。

相距る一步

心の常態と變態と其の大に異なるものを擧ぐれば、歴々として指點すべきものあるも、其の源頭に立つて差を求むれば、相距ること一步。吾等は

能く我が意識によつて統一し得るも時に二重人格の如き状を現じ、人格變換の如き態を感ずることなきにあらず。酒醒めて酔時の状を忘れ、酔うて殆ど人の變りし如き行動を敢てす。醒時の我、酔時の我、これ一か、これ二か。強烈なる精神病者を以て健全の人に比す。其の異なる甚しきも、其の微弱なるものに至つては、病否、遽に知り易からざるあり。一線の兩端相距る遠きも、點々連接して其の本に至れば、南するものと北するものと相隣る。常と異と亦此の如きか、「あ山の大將おれ一人」と豪語する幼兒の痴態はもとより精神病者を以て律する能はざるも、眼中王侯なき蘆原將軍の舉動は誇大妄想狂の甚しきものにあらずや、身も心も消え入るばかりの悲しさは吾等のしばし／＼實感する所、されど此の觀念の強烈となりて我が身を没却せんとする微小妄想は、自殺狂者に於て見る所にあらずや。

脅迫觀念

精神病は心の變態なり。然れども悉く心より來るものに非ず。身體の或る部分殊に腦髓其他神經系統の或る部分に故障を生じ、此の有機的疾患によりて精神に異常を生ずるものあり。又何等有機的疾患なくして或る種の觀念猛烈に他の觀念を制服し、常に此の觀念に脅迫せられて異常状態に陥るものあり。「爪を焼くと氣違になる」と云へる俚諺を確信せるの結果、誤て爪を火中に投ぜしより精神病者となれるものを、或る名醫の其の者の面前に爪を焼きて道理なきを示して治癒したりとの一話は、必ずしも假作の談にはあらず。吾等も亦しばし／＼脅迫觀念に支配せられ、有るべからざることは知りながらも、先入主となる其の觀念の深く胸底に印しては、除かんとして除き難く、自ら省みて憫笑に絶えざる心象の起らざるにあらず

彼の罪を犯せるもの、逮捕を恐るゝの極、戦々兢兢々として心落ち著かず、人を見れば探偵と思ひて、終に其の舉動の爲に怪まるゝ如きも亦其の一例なり。唯だ其觀念の比較的微弱にして他と調制せらるゝは、平常の態なれど、一たび其の常軌を逸するに至つては終に病者の列に入らざるを得ず。

憑依

我が國古來憑依の信仰あり。天狗憑、狐憑の如き最も著名なるものにして、地方によりては犬神憑、飯綱憑、とうびやう憑の如きあり。これらの憑依は多く其の傳説の盛なる所に行はれて、其の傳説の之れなき地方には其の現象少く、偶々之れあるも亦其の人の憑依に就いて信仰を有するに由る。想ふに此等の憑依の信仰の意識的に又は無意識的に其の人の心に浸染し、何等かの機會に於て、其の觀念の強烈となりて、曾て潜在的なりしも

の顯在的の勢力を養ひ來つて、從來繼續したりし意識の中心點を侵して、其の人格を變換し、全然別人の如き言動を敢てし、若くは顯在的に繼續し來れる從來の中心點の外に、別個の中心點を造り、平常の我の外に、異常の我を生じ、第一人格以外に第二人格を出し、時に第二人格の爲に第一人格の壓迫せらるゝが如きの奇態を生ずるにあらざるか。

狐憑

ベルツ博士曾て狐憑に關して精細なる研究を公にす、其の中にいふ。

第一、此の病を以て日本國の固有病と信ずるは誤れり。蓋し之れと同じき病狀は亞細亞全洲に散在し、唯だ國によりて其の名稱を異にするのみ、是故に人若し此の病の鬼類の所爲なることを信認する印度人に向ひて、これ狐狸の所爲なりと云はゞ、彼れ必らず笑はん。又日本人

に向ひて此の病は人體に類似したる鬼の所爲なりと云はゞ亦必らず笑ふなるべし。

第二、狐憑は唯だ此病を信ずる人のみを侵して此病を信ぜざる人を侵すことなし。

第三、狐憑は魯鈍蒙昧なる者、或は病患により若くは劇烈なる恐怖によりて一時精神の衰弱したる人のみを侵す。

第四、本病を狐憑と信ずるものは概ね婦女子少年輩なり、故に此の病は大抵婦女子少年輩にあり。

第五、此の病に罹るものゝ自ら以て病因なりと信ずる所の獸類は土地によりて同じからず、或は以て狐とし、或は以て犬とし、或は以て狸となすの類これなり。

第六、此の病は患者の思慮平生に復するに於て治癒す。これ或は本源

なりし疾患の治癒するにより、或は某人或は某神佛を講ずる人の力に頼るなり。

これたゞ其の要のみなりと雖も、以て此の病の全く自己の心より生ずるものにして他より憑依するにあらざるや明かなり。「普門品經」にいふ、

内に恐懼を發せざれば、外に則ち畏るゝことなし。内に悲哀あるなくんば、外に則ち涙出でず。内に鬼神の想を發せば、外に百千の鬼神の衆あり。皆來つて之れに歸す。これに緣りて病を致し、或は死亡に至り無數の苦を受く、皆邪心不正の故に由る。

内に其の想あつて外に此の事あり。平生の見聞毫も忽せにすべからざるものあり。

狐を叱す